モノグラフ
中学生の世界
vol. 41

生活体験

目次

要約とまとめ …… 2

プロローグ　情報化社会と青少年 …… 4

第Ⅰ章　体験を持っているか

1．サンプルの概要 ……16
2．体験についてのカテゴリー ……19
3．体験の量 ……19

第Ⅱ章　体験を広くとらえてみる

1．遊びの体験 ……28
2．手伝いの体験 ……32
3．自立の習慣 ……37

第Ⅲ章　自己像に関連させて

1．将来の見通し ……39
2．どんな仕事につきたいか ……42
3．自分への自信 ……45

まとめに代えて ……50

資料1　調査票見本 ……51
資料2　学年・性別集計表 ……62

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

要約とまとめ

静岡大学教授
深谷昌志

① 自然体験

カエルにさわったことが１度もない生徒は23％、川で泳いだことのない生徒も29％に達する。（**P.20・表５**）

② 感覚の体験

牛や馬に１度もさわったことのない生徒は23％、生まれたばかりの赤ちゃんを見たことのない生徒は49％になる。（**P.21・表６**）

③ 生活体験

洗濯物をほしたことのない生徒が13％、魚を焼いたことのない生徒が42％など、生活体験の乏しさが目につく。（**P.23・表８**）

④ 体験と学年

学年が上がっても、生徒たちの体験量は増加しない。（**P.26・図２**）

⑤ 遊びの体験

トランプ（ウノ）やファミコンはしているが、お手玉やたけうまは数回しかしたことがない。（**P.29・表11**）

⑥　手伝い

手伝いの中でよくしているのは「食器を流しに運ぶ」くらいに限られている。（P.33・図6）

⑦　自立の習慣

机のまわりをきちんと整頓している生徒は4割にとどまっている。（P.37・図9）

⑧　つきたい仕事

決められた平凡な仕事をしたいという生徒が多い。（P.42・図12）

⑨　自分についての自信

絶食して勉強したり、暑い日に外で立っていたりするのは自信がない。（P.46・図15）

〔ま　と　め〕

生徒たちは、自然体験や感覚の体験に欠ける。それと同時に、遊びの体験や手伝いの体験にも乏しい。直接体験に欠けていてもよいと思うが、生徒たちは将来にも明るい見通しを抱いていない。自分に自信を持てず、その上、さまざまな体験も持っていない。そうした生徒たちの成長のスタイルに心もとなさが感じられてならない。

【調査概要】

対象●東京・兵庫・香川・宮崎県の中学1～3年生1,860人

期間●1991年10月～11月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成

（人）

	男子	女子	計
中1	357	337	694
中2	293	283	576
中3	321	269	590
計	971	889	1,860

プロローグ

情報化社会と青少年

―生活体験不足のもうひとつの面―

きわめて特異な生活環境

今回のモノグラフは、中学生たちの生活体験をテーマにしている。生徒たちの体験不足は日常的に見聞きする通りだが、そうした生徒が情報に象徴される間接体験は豊富に持っているのはたしかであろう。そこで、生徒たちの直接体験の不足にふれる前に、もうひとつの面としての情報化との関連を考察しておこう。

現在の青少年が情報化社会の中に身を置いているのはあらためてふれるまでもなかろう。

そして、テレビがつき、マンガ雑誌が置かれ、ゲームウォッチがある暮らしを、あたり前と思いがちになる。

しかし、考えてみると、子どもたちがマスメディアに接するようになったのは、それほど昔の話ではない。具体例を活字メディアにとってみても、日本ではじめて子ども向け雑誌が刊行されたのは、「穎才新誌」（明治11年）といわれるが、子どもたちが、手軽な感じで雑誌を手にするようになったのは、「日本之少年」（明治22年）や「少年文学叢書」（明治24年、巌谷小波の「こがね丸」はこの中の１冊）の時代を経て、「立川文庫」（明治44年）や「日本少年」（明治39年）などが刊行されたころであろう。

子ども雑誌というと、鈴木三重吉の「赤い鳥」（大正７年）を思いおこす。たしかに、芥川竜之介の「杜子春」や宇野浩二の「蕗の下の神様」、さらに、北原白秋の「ペチカ」など、赤い鳥運動が、その後の児童文学に与えた影響は大きい。しかし、子どものサイドに立つと、残念ながら、そのころ「赤い鳥」を読んでいたのは山の手の富裕層の子に限られていた。

そうした経過は認められるものの、大正時代に入ると、回し読みをするなどの形で、雑誌を読みふける子どもの姿が増加し始める。

それまで、地域の中で友だちとともに、自然に囲まれて生活していた子どもにとって、雑誌は、遠い世界からの情報を伝達してくれる貴重なメディアであった。そうであるから、子どもたちは雑誌に熱中したのであろうが、現在からみると、活字メディアは月に何回か子どもの生活をいろどるお客にすぎなかった。

そうした子どもの世界に、放送メディアが届き始めるのは、昭和７年に、関屋五十二と村岡花子とが１週間交代で「コドモの新聞」を放送したころからであろう。といっても、「コドモの新聞」は午前６時から20分までの「子供の時間」に続く５分番組であるから、全部あわせても30分のテレビ番組１本にもみたない。

それでも、「コドモの新聞」は、マスメディアの情報が、子どもに直接伝達されたという意味で、子どもの歴史の中で画期的なできごとであった。そして、そうしたラジオ時代は「鐘の鳴る丘」を経て、「赤胴鈴之助」へいたる。

周知のように、テレビの受信契約件数は、昭和33年の100万台から、35年の500万台、そして37年には１千万台に達し、家庭あたりのテレビの普及率が５割に近づく。

それと同時に、昭和31年には「チロリン村とくるみの木」の放送が始まり、33年には国産テレビ映画の第１号として、「月光仮面」が登場する。さらに昭和38年、国産初のアニメ映像として、「鉄腕アトム」が作られ、その後「鉄人28号」や「おばけのＱ太郎」「巨人の星」などと続く。

これまで、かけ足をする形で、子どもと情報とのかかわりを考察してきた。奈良や平安の時代にも、子どもの姿があった。そうした子どもの歴史の中で、活字メディアと子どもたちが接し始めたのは、たかだかこの70～80年にすぎないし、ラジオの場合にしても、半世紀程度のつき合いである。

そう考えてくると、テレビを子守歌代わりに育った子どもたちは、きわめて特異な環境のもとで成長していると思わざるを得ない。

スイッチをひねるだけで、遠い世界が目の前にとびこんでくる。しかも、それを見ていれば、たいくつしないですむ。そうしたマスメディアを、子どもたちはどう感じているのであろうか。

テレビはがまんする対象

子どもたちに、「テレビが嫌いでテレビをぜんぜん見ない子」(①)、「テレビが好きで、テレビばかり見ている子」(③)、「見たい番組を選んで見ている子」(②) を連想させ、その子がどんなタイプの子なのかを尋ねてみた。

結果は、**図１**に示すとおりだが、子どもたちは、テレビばかり見ている子は遊びがうまいかもしれないが、生活が乱れていてだらしがない。そうかといって、テレビを見ない子はきちんとしていて勉強ができるかもしれないが、友だちづき合いがへただと評価している。

つまり、テレビを見すぎるのはだらしないが、テレビを見ない子もつき合いにくい。だから、テレビとはおぼれこまずにほどよくつき合っていく態度が必要だという見方である。

たしかにテレビはおもしろい。だから、つい見てしまう。しかしずっと見ていたのでは勉強をする時間がなくなる。それだけにさっと見て、適当な折に切りあげるのがテレビとつき合うコツだと、子どもたちは思っているのであろう。

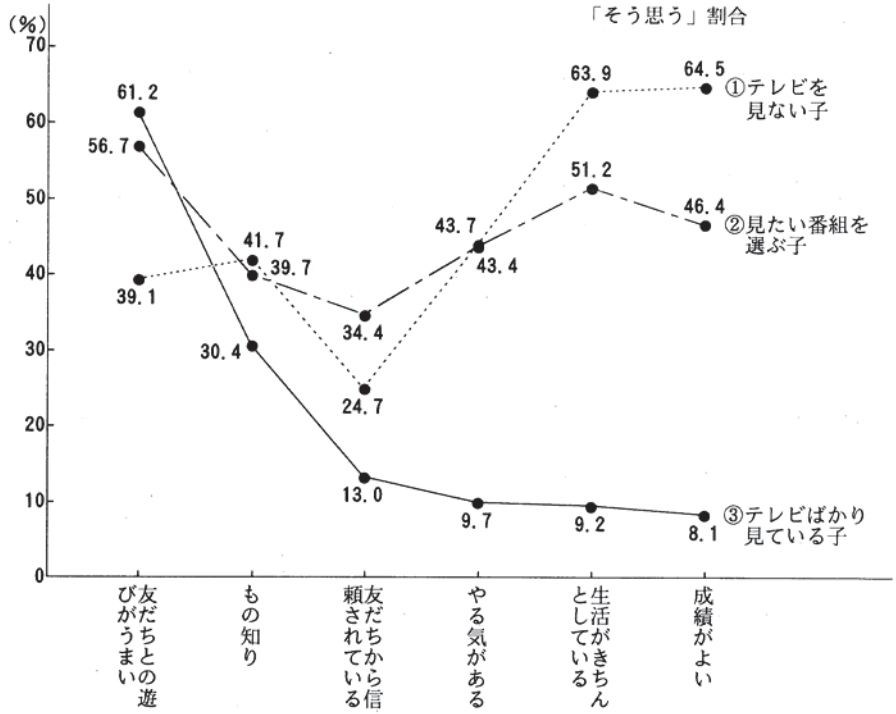
	ヒット曲番組	お笑い番組
①１時間半	38.0%	40.3%
②２時間	52.5%	52.5%
③３時間	64.9%	57.7%
④４時間	76.6%	69.5%

上記は、テレビの視聴の長さをテレビ番組とクロスさせたものだが、視聴時間の長い子ほど、そうした人気番組を見ている割合が高い。

もちろん、ヒット曲番組を見ていない子も、テレビが嫌いなのではあるまい。本当は見たいのだが、見ていると、勉強ができないからがまんをしているのであろう。

そして、そうした指摘が的外れでないことを**表１**が示している。視聴時間の長い子は、テレビをがまんしていないが、短くなるにつれて、がまんをしていると思う子が増加して

（図１）テレビの視聴態度と子どものタイプ



（表１）視聴のがまん度 × 視聴時間

（%）

	がまんしている			なんともいえない	好きなだけ		
	とても	かなり	やや		やや	かなり	いつも
1時間半以内	7.7	17.9	31.5	29.3	7.7	1.8	3.3
	57.1				12.8		
2時間台	1.0	5.7	28.6	35.6	17.3	7.0	4.9
	35.3				29.2		
3時間台	1.0	5.0	20.7	28.0	25.1	13.4	6.8
	26.7				45.3		
4時間以上	0.0	1.0	13.3	17.4	17.7	21.5	29.4
	14.3				68.6		
平均	2.2	7.0	23.7	28.1	17.8	10.8	10.5
	32.9				39.1		

いる。「なんとなく、たいくつなのでテレビを見てしまう」と答えている子は、視聴時間（表１参照）の短いほうから順に、11.4％、23.9％、40.4％、65.8％である。さらに「宿題があるのに、ついテレビを見てしまう」子も9.3％、15.2％、22.8％、45.1％となっている。

念のために視聴時間ごとに、「好きなだけテレビを見てよいとしたら、どれくらいテレビを見たいか」の数値を示しておこう。

視聴の長さ	見たい長さ
①１時間半以内	２時間21分
②２時間くらい	３時間６分
③３時間くらい	３時間48分
④４時間以上	４時間21分

テレビは魅力がある。だから、その魅力に負けてしまいそうだ。魔力にひきずりこまれないようにがんばろうというのが子どもの心情となる。

テレビと自己像

テレビは、子どもたちにとって、身近な友だちとしての役割を果たしている。それと同時に、その友だちは子どもをだらしなさへ誘いこむ悪友でもある。

それだけに、テレビという名の悪友との接し方が問題だ。見たいテレビをがまんしている子は、悪の誘惑に勝ったという気持ちで、自分に対し誇りを持てる。しかし、テレビを見続けている子は、誘惑に弱い自分というイメージを抱いて、だらしのない自己像に悩む。

そこで**表２**に目をとめてほしい。これは、「生活習慣が形成されているか」と「視聴時間」との関連を調べたものだが、表の示すところによると、「朝と晩歯をみがく」や「忘れ物をしない」など、生活習慣のきちんとした子のテレビ視聴時間は短い。換言するなら、生活のリズムの崩れている子は、ついテレビを見続けるのであろう。

そうした意味で、テレビ視聴の長短は、生活習慣が形成されているかどうかを占うバロメーターのような役割を果たしているともいえよう。

テレビを見ているうちに時間がたってしま

（表２）生活習慣 × 視聴時間

（％）

	ほとんど見ない	１時間	２時間	３時間	４時間以上
朝と晩歯をみがく	63.0	55.6	47.1	39.9	32.4
なんでも食べれる	45.0	37.2	30.6	29.7	26.5
忘れ物をしない	50.8	42.2	39.8	37.6	29.8
言われなくても宿題をする	63.4	55.9	50.9	44.1	35.2
家の掃除を手伝う	38.3	24.0	20.5	18.3	15.6

資料：文部省「児童の日常生活に関する調査」（昭和59年）より　　「いつもしている」割合

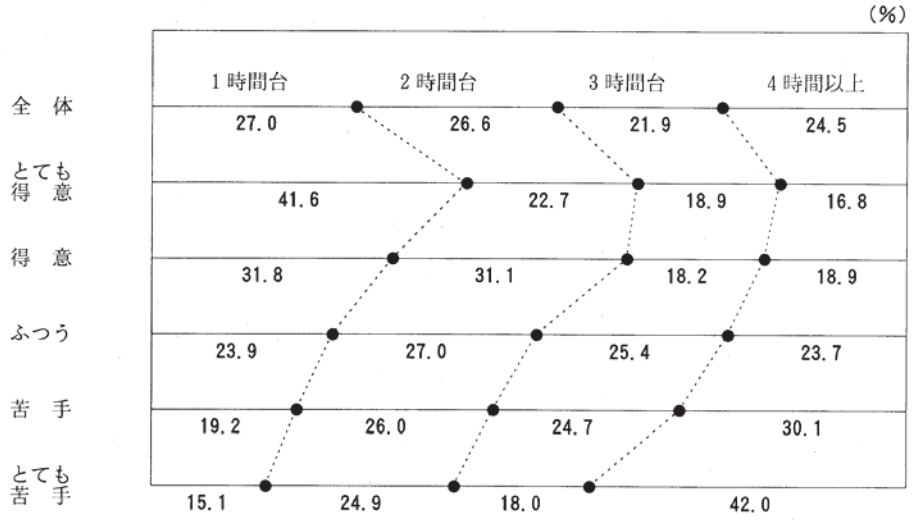
い、宿題をするのを忘れる。あるいは、家庭での勉強時間が短くなる。そうなれば、その結果として、短時間視聴群は学業成績がよく、視聴時間が長くなるにつれて、勉強の苦手な子が多くなるのは十分に予想されよう。

もちろん、勉強の苦手な子は、勉強に関心を持てないので、テレビを見続けてしまう。だから、長時間視聴は、勉強が不得意の結果であって、原因ではないという見方もなりたとう。いずれにせよ、学業成績と視聴時間について、**図2**のような結果が得られている。

さらに、もうひとつ、**表3**のようなデータもある。視聴時間の長い子どもは、自分の意志が弱いと思い、がんばれそうもないと感じている。

情報化社会の中で、子どもたちがもっと生

（図2）視聴時間 × 学業成績



（表3）自己評価 × 視聴時間

(%)

	1時間半以内	2時間台	3時間台	4時間以上
意志が弱いと思う	11.4	19.3	25.2	36.8
友だちがみんな立派に見える	35.5	38.2	38.3	43.8
なんとなく学校へ行きたくない	28.7	32.3	41.3	50.2
がんばっても医師になれない	41.2	45.1	53.7	65.5
がんばってもえらい人になれない	44.9	54.2	61.2	67.2

「とても＋かなりそう思う」割合

き生きとした感じで生活していると思っていた。しかし、今までふれたとおりに、子どもたちはテレビを誘惑の対象とみて、誘惑されないように心がけている。

そして、視聴時間の短い子どもは、誘惑をふりはらった自分に自信を持てる。それに対し、テレビを見ている子は、悪魔に魂を売ってしまったかのように、打ちひしがれた気持ちにおちいる。

マンガも気晴らしの対象

これまで、テレビと子どもとのかかわりを考察してきた。子どもたちの生活の中で、なんといってもテレビの占める比重が大きいので、テレビに着目したが、その他にも、情報化社会の到来は、子どもに多くのものをもたらしている。

試みに、子ども部屋をのぞいてみよう。小学校高学年生の場合、子ども部屋の中に自分のものとして持っているものは、ラジカセやCD、そしてテレビゲームのソフト、さらに子どもによってはパソコンまで、メカに囲まれて生活している。

もちろん、マンガ雑誌も多い。しかしここで、子どもたちがどの程度、マンガに接しているのかという実態にふれるつもりはない。青年層に読者が拡大されたといっても、コミック誌の発行部数が1年間に10億冊を超えるという数値をあげれば、マンガが子どもの心をいかにとらえているのかは明らかであろう。

そこで、問題になるのは、子どもたちが、どんな気持ちでマンガに接しているかであろう。

表4によれば、子どもたちは、マンガを読んだからといって、頭の回転が速くなったり、考える力がついたりすることはない。所詮、マンガは気晴らしの対象だと答えている。

もっとも、マンガの場合、**図3**に示したように、テレビほど、「マンガの接触量」と「学業成績」との関連は認められない。

マンガは読むといっても、それほどの時間をかけなくても、1冊を読める。そして、気分をスッキリさせてから机に向かう。疲れたら、また、マンガのページをめくる。そうした形で、勉強との両立が十分に可能な気晴らしであるあたりが、マンガの特性なのであろう。

そうした意味では、マンガもほどよくつき合うことが大事で、マンガにおぼれこむのはおろかな行為なのであろう。

そういえば、プラモデルやゲームウォッチ、ラジカセなど、子どもたちの環境を形づくっているものにそうした気晴らしの対象が多いのに気づく。

（表4）子どもたちのマンガ観

（%）

	思わない		どちらともいえない	思う	
	ぜんぜん	あまり		わりと	とても
頭の回転が速くなる	42.9	27.5	19.3	5.8	4.5
考える力がつく	38.1	28.6	19.8	9.3	4.2
友だちがふえる	36.0	26.9	26.5	6.6	4.0
頭が悪くなる	15.9	23.5	26.8	25.8	8.0
勉強をしなくなる	15.4	23.5	26.2	25.5	9.4

生活圏の狭さ

小学生の問題に多くを費やしてしまった。視野をもう少し広げ、情報化社会と中・高校生とのかかわりに目を向けてみたい。

中学生になると、子どもたちはテレビ離れを始め、ラジオやレコードなどに関心を向けるようになる。しかし、学校の授業や部活動などに追われ、生徒たちの行動半径は、それほどの広がりを見せない。

中・高校生たちに、学校が終わってからどんなことをしているか尋ねてみた。

	平日	休日
①テレビ	71%	84%
②勉　強	55%	46%
③雑　談	51%	41%
④ぼんやり	28%	48%

（「いつもしている」割合）

テレビを見て、そして勉強をし、雑談をする生活で、休日になると、これに「ぼんやりする」が加わる感じである。

図4は、大学生たちに、高校時代どんな生活をしていたかを尋ね、それとあわせて、もう一度、高校生活を送れるなら、どんなことをしたいのかを対比させて示した結果である。

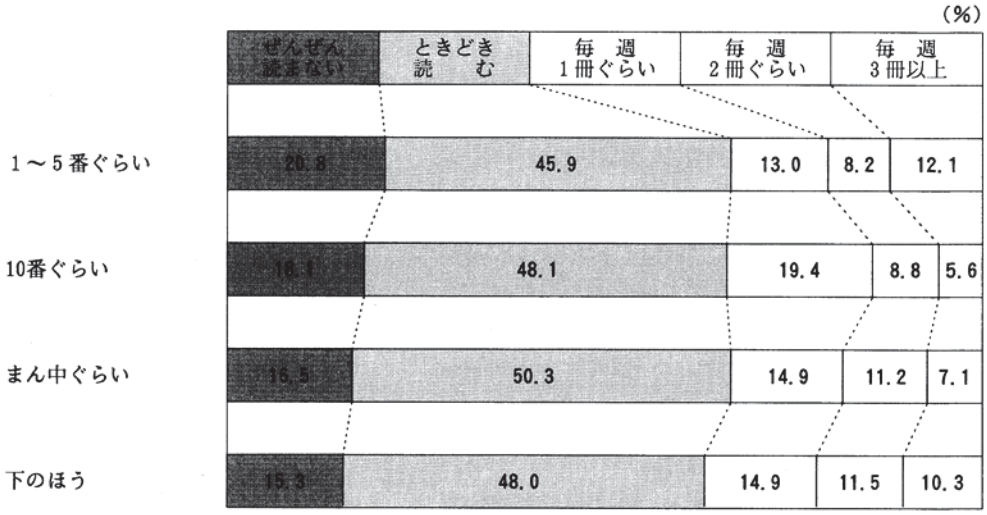
高校時代、授業をきくか、テレビを見るかしかしていなかった。しかし、小説を読んだり、映画を見にいったり、もっといろいろなことをすればよかったという。

なお、高校生に「いちばん楽しいのはどんなとき」なのかを尋ねてみた。

①友だちとすごすとき	72.2%
②ひとりで音楽をきく	14.8%
③テレビを見る	7.4%
④サークル活動	4.6%
⑤何もしないでぼんやり	1.0%

時間的にみると、テレビを見ていることが多い。しかし、テレビはそれほど楽しくない。気の合った友だちと雑談しているときが、いちばん充足感を味わえるが、そうしたときを

（図3）算数の成績 × マンガを読む量（雑誌）



それほど多くとれないという。

環境としてのテレビ

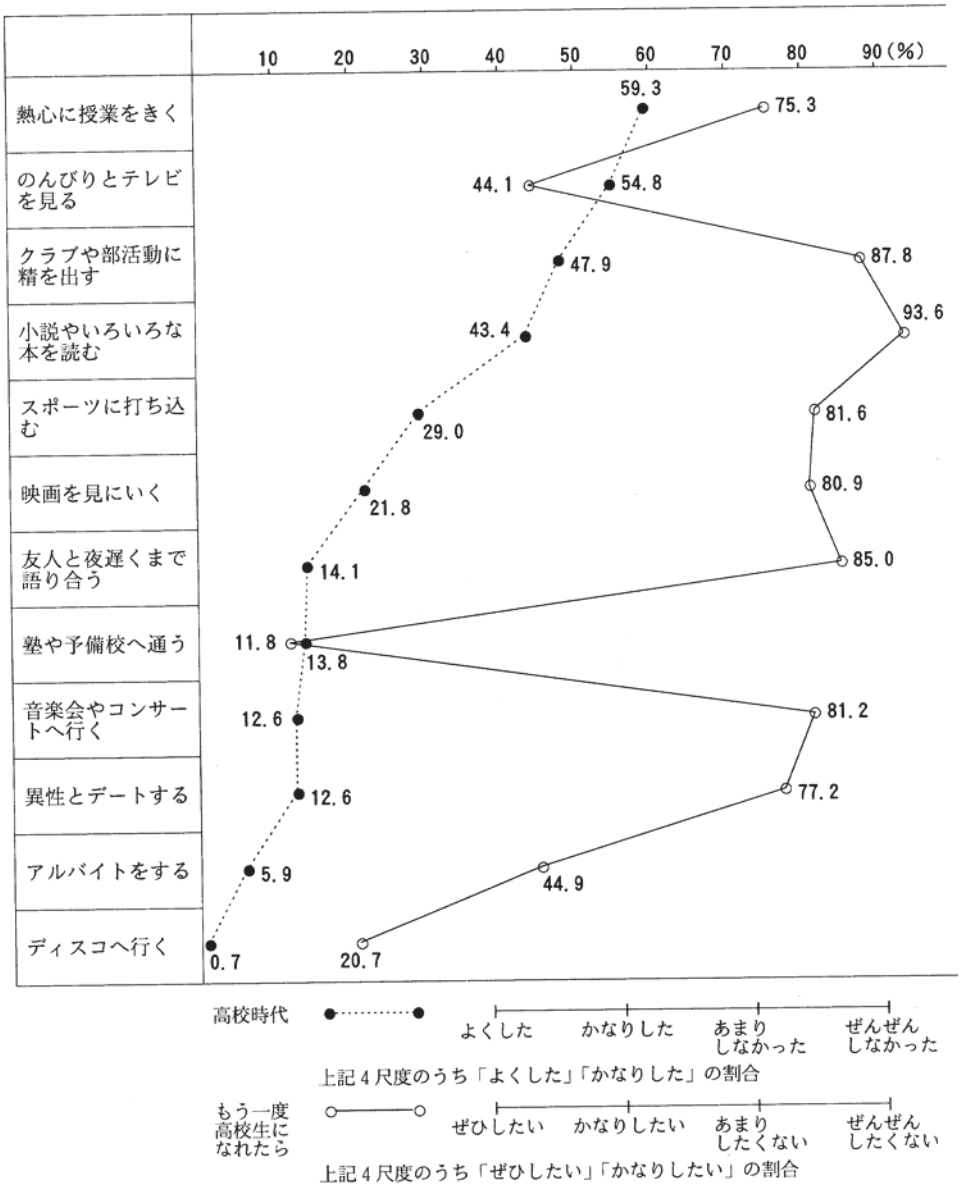
このように見てくると、情報化社会の到来によって、たしかに、客観的にみると、青少年のまわりはさまざまなものでいろどられ、はなやいでいるように見える。

しかし青少年たちは、テレビやマンガ、ラジカセに心をひかれていない。気晴らしや休息の対象としてならともかく、テレビやマンガに、充実感を見いだしにくいという。

とはいうものの、テレビやマンガはおもしろいので、つい、つき合いが長くなってしまう。その結果、意志の弱い自分という気持ちがつのってくる。

情報化社会の中で、だらしのない自分をイ

（図４）高校時代の行動体験と大学生の行動欲求の比較



メージに持って、孤独さを感じているのが、現代の青少年となる。端的にいって、情報化社会の到来は、孤独な子どもたちを生み出している。

それだけに、テレビに象徴されるマスメディアとの接し方が、子どもたちの人間形成にとっての重要な課題となる。

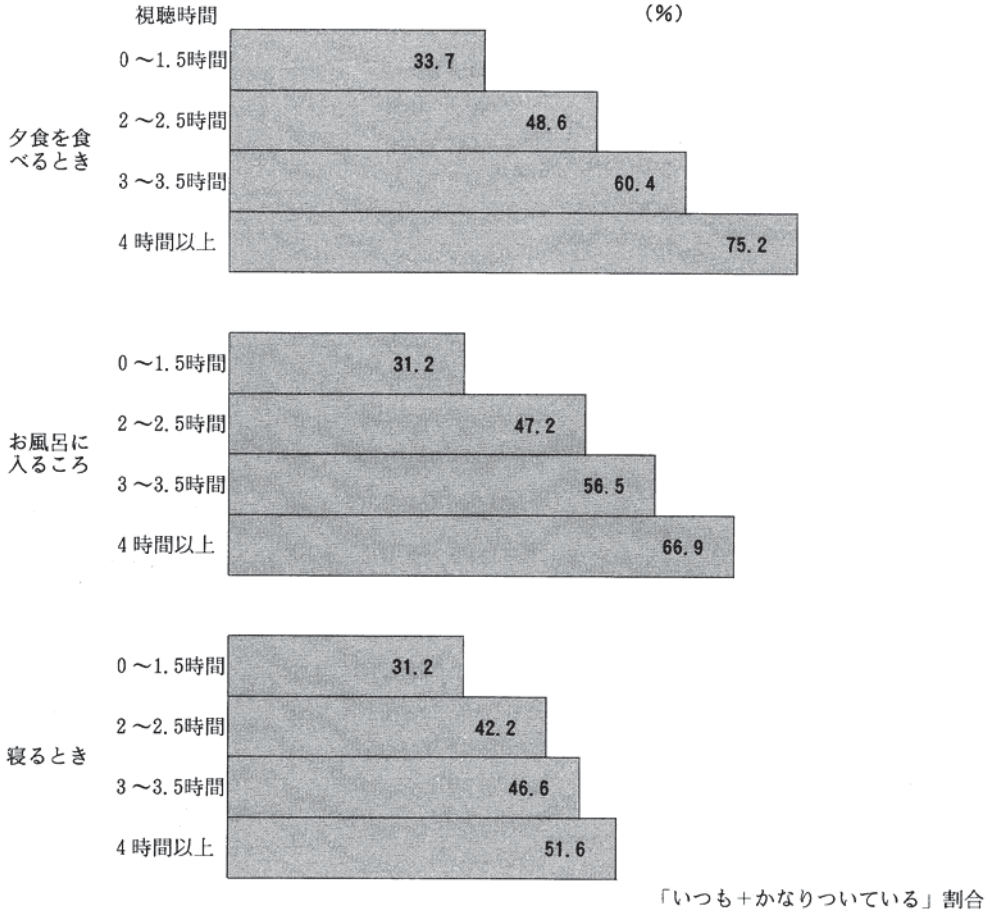
図5は、子どものテレビ視聴時間が、家庭の中でテレビのついている長さに左右されているのを示している。当然といえば、それまでだが、テレビがついているから、つい見てしまう。それに反し、テレビがついていなければつけてまでして、テレビを見る気持ちになれないのであろう。

そうした意味では、テレビにおぼれこむ子どもを作り出しているのは家庭のテレビ環境だといえなくもない。そして**図6**の結果も、テレビ好きの子どもが、テレビ好きの家庭から生まれているのを暗示している。

表5は、子どもたちに、どんな家庭に生まれてきたいのかを、テレビに関連させて尋ねた結果である。

この中で興味をひくのは、「親の決めた番組しか見せてくれない」家に生まれてきたくないが、かといって、「1日中テレビがついているような家」も好きになれないと、子どもたちが答えている事実であろう。そして「夜遅くまでテレビを見ていても何もいわな

（図5）テレビがついているか × 視聴時間



「いつも＋かなりついている」割合

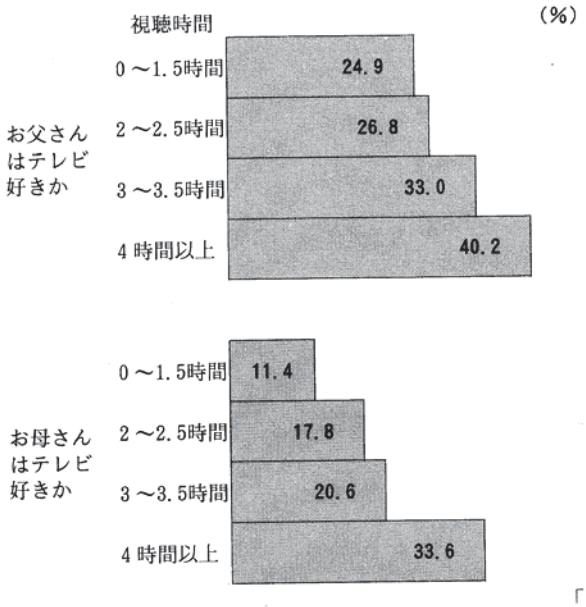
い」ようなだらしのない家庭も敬遠したいという。

子どもたちは、うるさすぎる家庭もいやだが、無責任な家も困ると答えており、それなりの節度のある家庭を望んでいる。

そこで、親たちに、テレビについてどんなしつけをしているのかを子どもの反応とダブらせて示すと、**図7**となる。「1日中テレビがついている」ような家は子どもも嫌っているが、親たちもそんなことはないと答えている。そして親がしつけているつもりなのに、子どもが嫌っているのは、夜9時すぎと夕食時のテレビで、これらの時間にテレビを消すかどうかが、家庭のきびしさを示すバロメーターとなろう。

いずれにせよ、子どもたちはマスコミとのほどよい接触に心がけている。それはよいのだが、子どもたちのこうした生活は中学生になっても続いていく。そして、マスメディアには接しているものの、なまの体験に乏しい生徒が育ってくる。というより、生徒たちを見ていると、間接体験の肥大と直接体験の縮小とのアンバランスが目につく。以下、本モノグラフでは、体験のもうひとつの面である生活体験の状況について考えていくことにしたい。

（図6）両親がテレビ好きか × 視聴時間



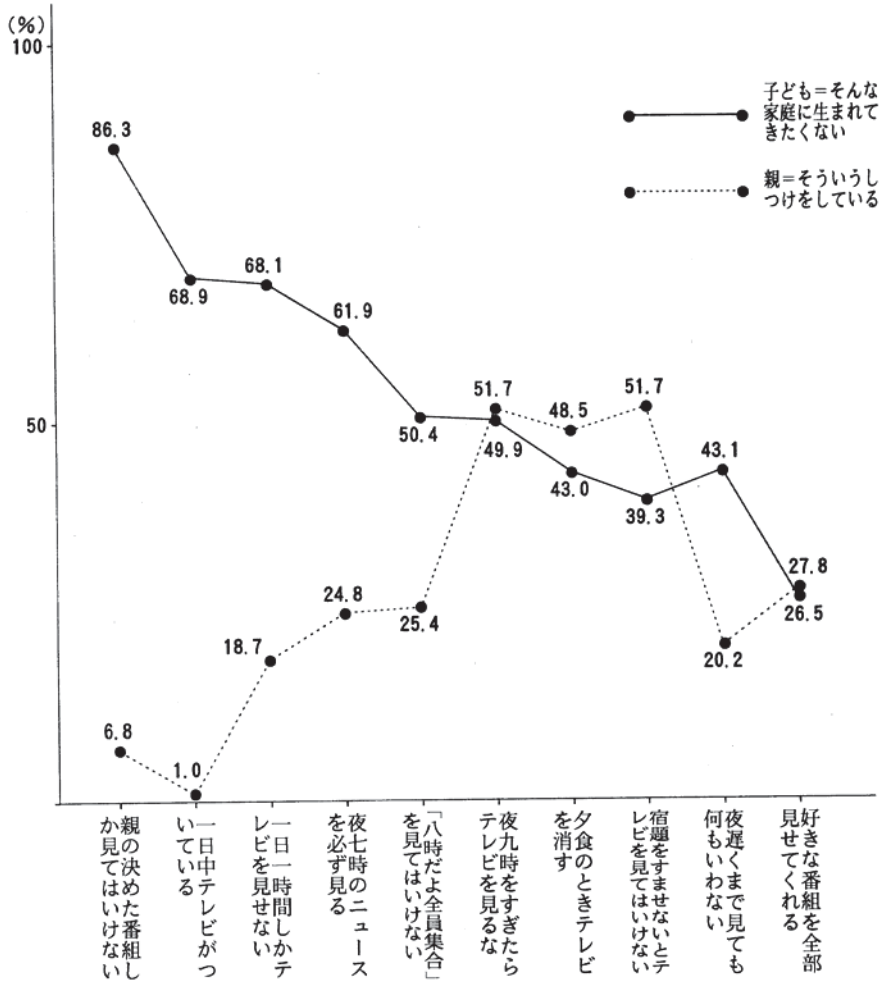
「とても＋かなり好き」の割合

（表５）どんな家庭に生まれてきたいか

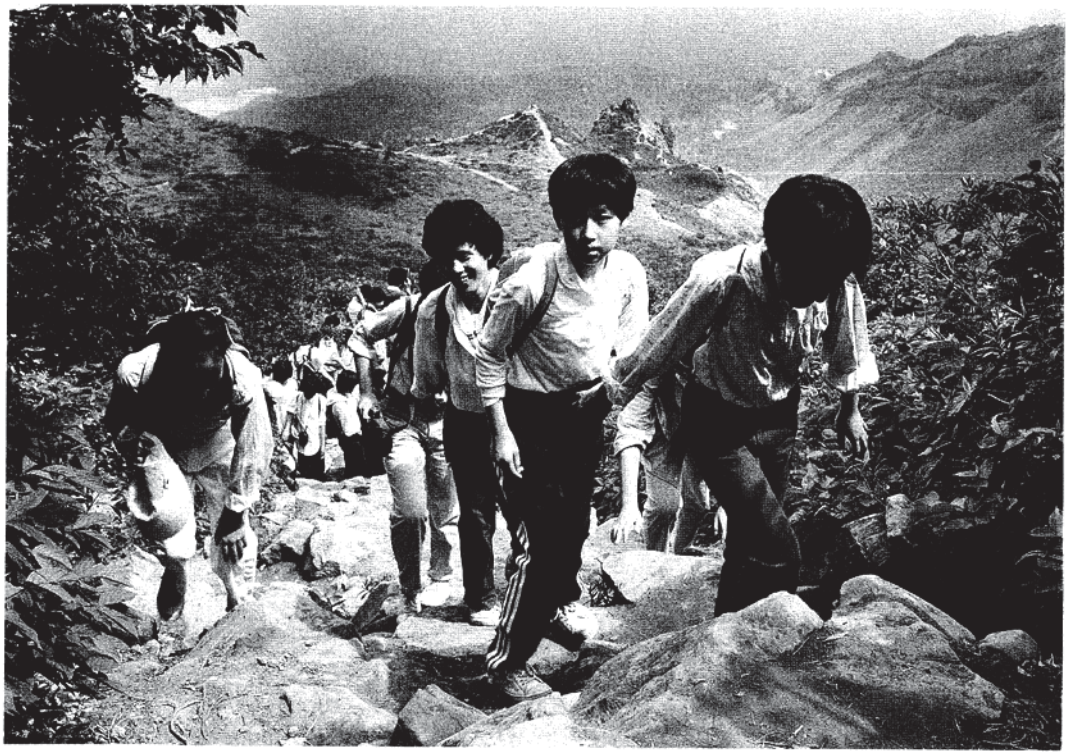
（%）

	生まれてきたい		半分半分	生まれてきたくない	
	ぜひ	できたら		あまり	まったく
親の決めた番組しか見てはいけない	1.9	1.4	10.4	28.3	58.0
	3.3			86.3	
１日中テレビがついている	6.7	5.2	19.2	25.8	43.1
	11.9			68.9	
１日１時間しかテレビを見せてくれない	5.5	4.4	22.0	30.1	38.0
	9.9			68.1	
午後７時のニュースを必ず見なくてはいけない	4.3	4.8	28.9	28.5	33.4
	9.1			61.9	
「八時だよ全員集合」を見てはいけない	8.8	7.6	33.2	21.6	28.8
	16.4			50.4	
夜９時すぎるとテレビを見てはいけない	8.9	8.4	32.8	27.1	22.8
	17.3			49.9	
ご飯のときテレビを消す	12.1	11.1	33.5	21.5	21.5
	23.2			43.0	
宿題をすませないとテレビを見てはいけない	13.6	11.6	35.6	20.8	18.5
	25.2			39.3	
夜遅くまでテレビを見ても何もいわない	16.4	13.3	27.3	22.6	20.5
	29.7			43.1	
好きな番組を全部見せてくれる	29.6	20.6	23.3	16.5	10.0
	50.2			26.5	

（図７）どんなしつけをしているか



第Ⅰ章　体験を持っているか



1．サンプルの概要

調査結果の紹介に入る前に、サンプルの概要にふれておこう。まず、部活動の状況は**表1**にくわしい。41％の生徒は運動部に積極的に参加しているが、中3になると、部活動をやめている者が44％に達する。

また、テレビの視聴時間は**表2**の通りで、1時間以内から4時間半以上見ている者まで、視聴時間にかなり開きが認められる。しかし、本号はテレビ視聴を問題にするものではないので、結果のみにふれ、考察は控えたいと思う。

さらに、勉強時間は**表3**のように、平均すると、2時間くらいを勉強に費やしている。もっとも、さすがに中3になると、3時間以上、勉強している生徒が32％に達する。

念のために、学業成績についての自己評価を**表4**に示した。「やや」の18％を含めて、勉強の得意な生徒は30％に限られているが、勉強の苦手な生徒は「やや」の20％を含めて47％に達する。しかも「とても苦手」な生徒が中1の12％から、中2の14％を経て、中3では18％と、学年が上がるにつれて増加している。

こうした傾向は、現代の中学生に共通する問題として、これまでこの「モノグラフ」で考察を加えているので、サンプルの概要はこれくらいにとどめておこう。

（表１）部活動

└→ 4割が運動部

（%）

	全体	性		学年		
		男子	女子	中1	中2	中3
入ったことがない	3.5	4.5	2.4	4.5	2.6	3.1
入ったが今はやめている	17.7	18.8	16.6	3.2	8.9	43.9
運動部 積極的	41.4	46.1	36.0	48.4	45.1	29.2
運動部 サボりぎみ	20.4	19.7	21.2	25.6	23.2	11.3
文化部 積極的	10.9	6.0	16.3	11.4	14.2	7.1
文化部 サボりぎみ	6.1	4.9	7.5	6.9	6.0	5.4

（表２）テレビの視聴時間

└→視聴時間にちらばり

（%）

	1時間以内	1時間半	2時間	2時間半	3時間	3時間半	4時間	4時間半以上
全体	6.2	9.0	14.9	14.1	16.4	9.9	10.9	18.6
中1	7.1	10.3	14.2	13.7	14.9	10.0	12.2	17.6
中2	3.5	5.6	12.0	15.3	16.7	10.5	12.3	24.1
中3	7.8	10.8	18.9	13.1	17.9	9.0	8.2	14.3

（表３）勉強時間

→ほぼ２時間

（%）

	毎日30分以内	１時間	１時間半	２時間	２時間半	３時間	３時間以上
全　体	22.1	15.8	16.4	21.2	9.5	8.0	7.0
中　1	19.7	17.7	20.2	24.0	9.9	5.5	3.0
中　2	33.5	19.9	16.9	17.5	6.5	3.9	1.8
中　3	14.0	9.6	11.5	21.4	12.0	14.9	16.6

（表４）学業成績

→苦手が47%

（%）

		得　意			ふつう	苦　手		
		とても	かなり	やや		やや	かなり	とても
全　体		4.5	7.5	18.1	22.9	20.4	12.1	14.5
性	男　子	5.9	8.5	20.3	24.2	18.5	9.6	13.0
	女　子	3.0	6.4	15.8	21.4	22.5	14.8	16.1
学年	中　1	6.1	9.4	20.7	23.1	19.2	9.5	12.0
	中　2	4.0	7.9	16.3	22.7	21.3	13.6	14.2
	中　3	3.2	4.9	16.9	22.4	21.0	13.7	17.9

2．体験についてのカテゴリー

一口に「体験」といっても、さまざまなタイプがある。一般的には冒頭でふれたように、「セミやトンボをとる」などの直接体験を、「テレビを通してアメリカの市民生活を知る」に象徴される間接体験と対比させ、直接体験が減少するのと反比例する形で、間接体験が増大していると指摘する場合が多い。

たしかにその通りだと思うが、直接体験といっても、「牛や馬にさわる」や「生まれたばかりの赤ちゃんにさわる」「洗濯機を使わずに手でハンカチを洗う」などのさまざまなジャンルが考えられる。

そこで、この号では、体験を便宜上、以下の6つに分類してみた。もちろん、こうした分類は経験的に構想したものであって、理論的に設定したものではない。

①自然体験－「たき火をする」「カエルにさわる」などの12項目

②感覚の体験－「犬や猫にさわる」「1人で夜道を歩く」などの9項目

③人間関係の体験－「赤ちゃんをおんぶする」「親戚や家族が死ぬ」などの9項目

④生活体験－「カナヅチでクギを打つ」「生タマゴを割る」などの13項目

⑤リーダーの体験－「人前で歌ったり劇をする」などの4項目

⑥技術の体験－「電子レンジで食べ物を温める」などの5項目

通常、生活体験というとき、①～④のいずれかをイメージにおいているように思う。それに対し⑥は現代的な体験だし、⑤もタイプは異なり、直接体験や生活体験とはいえないが、これも広義での体験に属そう。

それでは、中学生たちは、そうした体験をどれくらいしているのだろうか。

3．体験の量

まず、自然体験についてのデータを**表5**に示した。

この結果は微妙なものを含んでいる。「草むしりをする」や「セミやトンボをとる」について、「1度もない」生徒は、さすがに1割強だが、かといって、「数えきれないほどある」と答えた者も2～3割にとどまっている。そして5～6割の生徒は、「何回かある」という。

セミやトンボをとったり、カエルにさわったりするのが、ごくありふれた日常的な行為と考えるなら、そうした行為を「何回かしたことがある」というのは少ないように思う。

次に感覚についての体験を**表6**に示した。ここでも「犬や猫にさわったことはあるが、生まれたばかりの赤ちゃんを見たことがない」が、全体の傾向となる。

人間関係の体験については、**表7**にくわしい。いずれの項目も、「何回かしたことがある」反応が過半数を超える。

個々のデータについての考察はのちにゆずるとして、もう少しデータを紹介しよう。

生活体験については、**表8**で「かん切りで缶詰をあける」や「生タマゴを割る」などは数えきれないほどしているが、「洗濯物をほす」や「カナヅチでクギを打つ」は、数回程度にとどまっている。

リーダーの体験は**表9**のように「1度もな

い」と答えている者が多い。そして、技術の体験については、「電子レンジで食べ物を温めたこと」が「数えきれないほどある」と答えている生徒は6割に達する（**表10**）。

今回の設問項目は巻末に付したので参照してほしいが、この他にも「外国人と話をする」「スーパーで買い物をする」など、どちらのカテゴリーにも入れにくい項目を含めて、60項目について生徒たちの体験を尋ねている。

こうした中で、体験量のもっとも多い項目の上位6項目をまとめてみると、以下となる。

1位　生タマゴを割る　68.4%
2位　犬や猫にさわる　65.5%
3位　インスタントラーメンを作る　64.6%
4位　かん切りで缶詰をあける　62.4%
5位　電子レンジで食べ物を温める　60.4%
6位　スーパーで1人で買い物をする　49.2%

（「数えきれないほどある」割合）

（表5）自然体験

→「何回かある」が多い

（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年 中1	学年 中2	学年 中3	性 男子	性 女子
草むしりをする	10.7	66.5	22.8	9.8	11.0	11.6	13.4	7.9
セミやトンボをとる	11.5	54.9	33.6	10.6	11.3	12.7	7.1	16.3
たき火をする	15.1	68.0	16.9	19.2	12.2	12.9	12.2	18.2
カエルにさわる	22.8	56.4	20.8	21.5	22.8	24.4	11.3	35.5
植物を育てる	25.5	68.0	6.5	23.4	24.0	29.4	31.1	19.3
川で泳ぐ	29.1	60.8	10.1	29.6	28.5	29.1	23.6	35.1
魚をとる	31.4	55.0	13.6	32.9	29.7	31.5	23.2	40.5
屋根の上を歩く	39.0	47.0	14.0	36.9	41.2	39.5	30.0	48.9
田植えをする	56.8	39.2	4.0	52.0	58.2	61.2	57.3	56.3
稲刈りをする	61.3	34.6	4.1	57.1	64.5	63.3	60.1	62.6
電気のつかない生活をする	83.4	14.7	1.9	85.1	82.4	82.6	78.7	88.6
テレビのない生活をする	94.0	5.3	0.7	94.1	94.6	93.1	91.4	96.8

学年・性別は「1度もない」割合
（　）は最大値

それでは、体験の乏しいのはどういう項目なのか。これも6項目を抽出してみよう。

1位　テレビのない所で生活する　94.0%
2位　外国旅行をする　89.8%
3位　伝言ファックスを使う　88.9%
4位　死ぬほどの大病をする　84.4%
5位　電気のつかない所で生活をする　83.4%
6位　生徒会の役員をする　70.7%
（「1度もない」割合）

中学生が大病をするとは思われないし、電気のない暮らしというのも、現実的ではないように考えられる。したがって、かつてと比べ生徒たちの直接体験が、ある程度まで減少するのはやむをえないように思われる。しかし、そうはいっても減少の程度がどのくらいなのかが大事になる。

そこで、これまでのいくつかの体験領域の項目の中から、典型的と思われる項目を拾い

（表6）感覚の体験

└──→犬や猫にさわるくらい

（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年			性	
				中1	中2	中3	男子	女子
犬や猫にさわる	0.9	33.6	65.5	0.4	1.0	1.2	1.3	0.3
1人で夜道を歩く	7.8	44.7	47.5	9.8	6.8	6.5	4.1	11.8
魚の骨をのどにさす	19.7	71.7	8.6	19.2	19.6	20.1	21.3	17.9
牛や馬にさわる	22.9	69.6	7.5	18.5	23.6	27.6	21.6	24.4
犬においかけられる	28.2	63.4	8.4	33.0	24.8	25.8	30.8	25.3
死んだ人の顔を見る	35.3	63.7	1.0	37.2	33.4	34.9	36.8	33.7
生まれたばかりの赤ちゃんを見る	48.6	48.0	3.4	47.6	50.7	48.1	51.0	46.2
犬や猫が死んで泣く	50.8	45.2	4.0	52.2	51.0	48.4	62.0	38.3
死ぬほどの大病をする	84.4	15.1	0.5	86.1	84.6	81.8	81.3	87.6

学年・性別は「1度もない」割合
◯は最大値

出して１つの図にまとめると、**図１**の通りとなる。

カエルに「数えきれないくらいさわった」生徒が21％で、「１度もさわったことがない」者は23％だという。そして、牛や馬にさわったことがない生徒も23％に達する。そうした意味では、中学生としては自然体験や感覚の体験に欠けるのはたしかなように思われる。

なお、体験の学年による変化を**図２**に示したが、学年が上がっても生徒たちの体験は、ほとんど増加していない。小学生時代と違って、中学生になると、学校にいる時間も長く、

（表７）人間関係の体験

└──→**あまりしていない**

（％）

	１度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年			性	
				中１	中２	中３	男子	女子
けんかして人をたたく	13.7	59.2	27.1	14.6	11.9	14.5	8.4	19.5
先生にぶたれる	20.5	62.7	16.8	23.1	18.4	19.6	10.1	31.9
母親にぶたれる	23.2	59.0	17.8	25.0	21.0	23.4	22.2	24.3
父親にぶたれる	27.5	56.2	16.3	27.7	27.8	27.2	19.4	36.4
赤ちゃんをおんぶする	29.1	57.3	13.6	29.2	30.5	27.4	35.9	21.6
親戚や家族が死ぬ	30.2	68.7	1.1	32.2	29.6	28.6	30.8	29.6
親友が転校する	32.8	65.7	1.5	32.5	28.7	36.9	30.1	35.6
とっくみあいのケンカをする	40.8	53.6	5.6	37.4	42.9	43.2	20.4	63.2
赤ちゃんのおむつをかえる	70.3	25.5	4.2	71.1	68.9	70.5	84.3	55.0

学年・性別は「１度もない」割合
（　）は最大値

部活動に多くの時間をさくので、自然体験や感覚の体験が増しにくいのかもしれない。それにしても中学の3年間を通して、体験がまったく増加しないのは奇妙な感じがする。

それならば、性別との関係はどうか。**図3**から明らかなように、「セミやトンボをとる」などの自然体験は、女子よりも男子に多い。それと対称的に、「リンゴの皮をむく」などの生活体験は、男子より女子のほうが体験している割合が多い。

（表8）生活体験

→何回かリンゴの皮をむいた

（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年 中1	学年 中2	学年 中3	性 男子	性 女子
カナヅチでクギを打つ	0.4	53.7	45.9	0.3	0.7	0.3	0.1	0.8
かん切りで缶詰をあける	1.6	36.0	62.4	1.7	1.4	1.5	1.7	1.5
生タマゴを割る	3.8	27.8	68.4	3.8	4.9	2.7	3.9	3.6
リンゴの皮をむく	4.9	50.5	44.6	6.7	3.3	4.3	8.2	1.2
のこぎりで木を切る	9.2	68.8	22.0	10.3	8.5	8.5	5.6	13.1
ぞうきんで掃除する	11.4	70.9	17.7	13.0	10.8	10.2	17.3 >	5.1
洗濯物をほす	12.5	61.4	26.1	13.8	10.4	13.1	21.7 >	2.6
食器を1人で洗う	14.6	58.2	27.2	15.8	13.8	14.1	25.2 >	2.9
おもてに水をまく	21.9	60.8	17.3	20.5	21.8	23.7	27.1 >	16.3
手でハンカチを洗う	25.3	60.5	14.2	25.1	23.1	27.8	40.2 >	9.2
1人でごはんをたく	28.8	46.9	24.3	29.7	28.7	28.0	43.1 >	13.2
魚を焼く	41.9	47.4	10.7	42.8	41.0	41.5	49.4 >	33.5
靴に靴ずみをぬる	48.9	43.2	7.9	49.9	48.6	47.9	52.3	45.2

学年・性別は「1度もない」割合

◯は最大値

（表９）リーダーの体験

└──→体験していない

（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年			性	
				中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
人前で歌ったり劇をする	15.8	(76.2)	8.0	13.6	19.0	15.4	20.6	10.7
何百人の前で話す	(57.9)	39.2	2.9	58.4	56.9	58.3	59.5	56.1
文化祭などのリーダーになる	(63.9)	34.2	1.9	63.0	66.9	61.4	64.4	63.0
生徒会などの役員になる	(70.7)	28.0	1.3	70.1	75.0	67.2	69.9	71.4

学年・性別は「１度もない」割合
（　）は最大値

（表10）技術の体験

└──→電子レンジは使っている

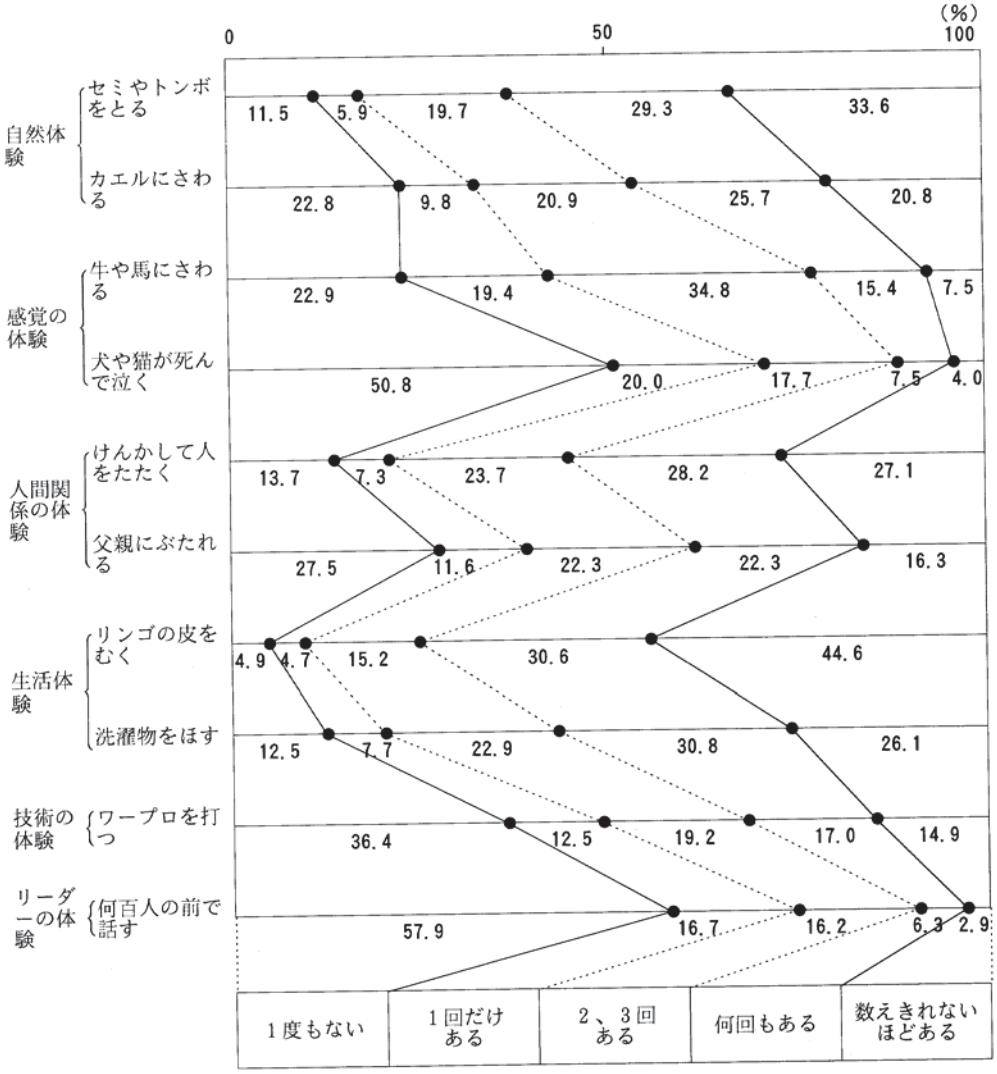
（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年			性	
				中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
電子レンジで食べ物を温める	5.9	33.7	(60.4)	6.9	6.3	4.4	6.2	5.6
テレビ番組の留守録をする	18.8	38.9	(42.3)	23.5	17.2	14.9	15.5	22.4
ワープロを打つ	36.4	(48.7)	14.9	40.1	31.5	36.7	38.0	34.6
クッキーを焼く	(44.9)	41.9	13.2	47.7	44.8	41.6	74.0	13.1
伝言ファックスで情報を交換する	(88.9)	9.9	1.2	86.8	91.8	88.0	87.6	90.1

学年・性別は「１度もない」割合
（　）は最大値

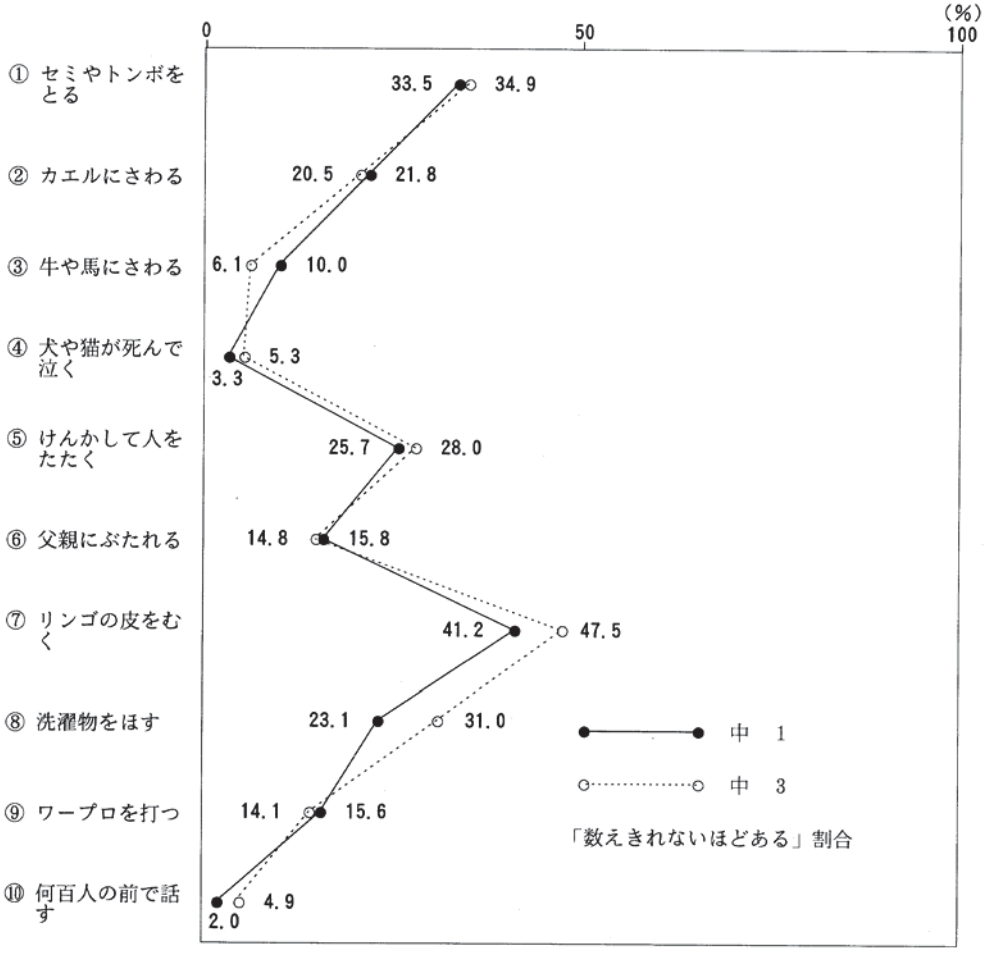
（図１）体験の量

→「カエルにさわったことがない」が23％

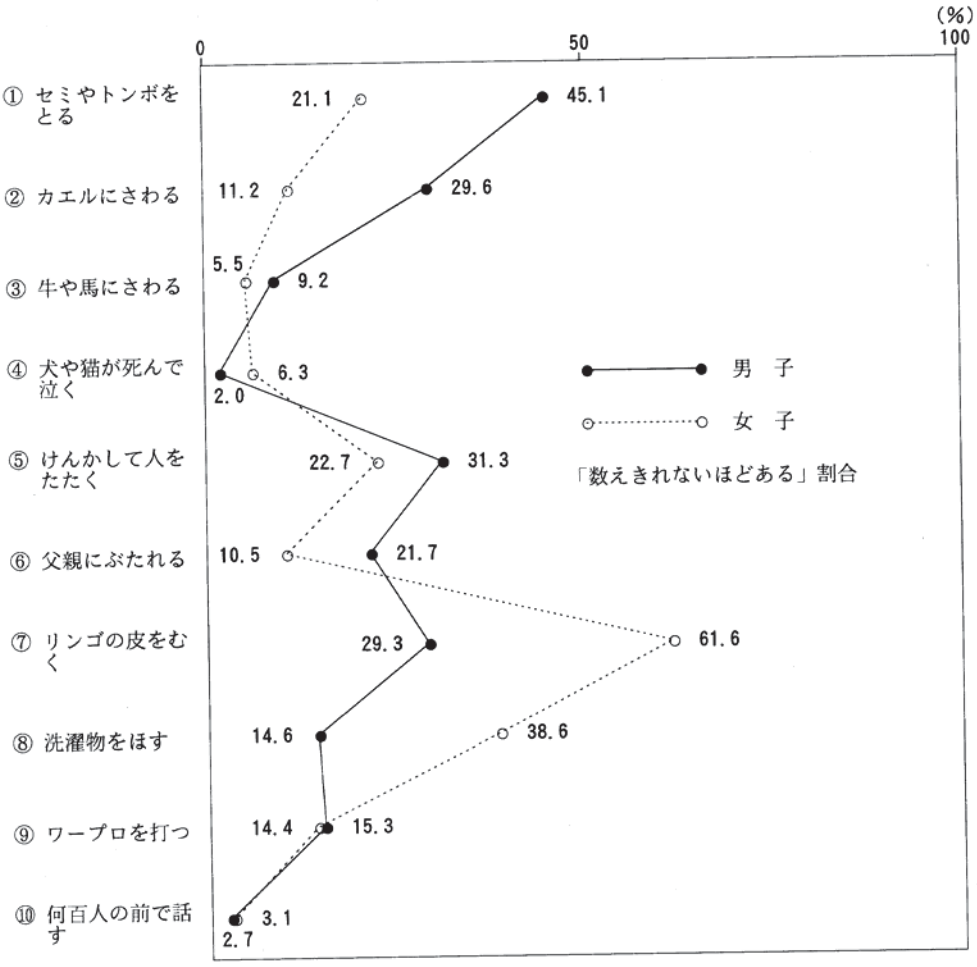


（図２）体験 × 学年

→学年が上がっても変わらない



（図３）体験 × 性


(%)
0
50
100
① セミやトンボをとる
② カエルにさわる
③ 牛や馬にさわる
④ 犬や猫が死んで泣く
⑤ けんかして人をたたく
⑥ 父親にぶたれる
⑦ リンゴの皮をむく
⑧ 洗濯物をほす
⑨ ワープロを打つ
⑩ 何百人の前で話す
21.1
45.1
11.2
29.6
5.5
9.2
6.3
2.0
22.7
31.3
10.5
21.7
61.6
29.3
14.6
38.6
14.4
15.3
3.1
2.7
男 子
女 子
「数えきれないほどある」割合

第Ⅱ章　体験を広くとらえてみる

1．遊びの体験

これまで、体験をいくつかのカテゴリーに分けて考察を加えてきた。そして生活体験の欠如が、予想される通りに進んでいるのを明らかにしてきた。

そこで、以下、やや角度を変えた体験についてのデータを紹介すると、**表11**の通りとなる。トランプ（ウノ）やファミコン、そしてオセロは数えきれないくらいしている。しかし、たけうまやお手玉は、数回しかしたことがないという反応である。

トランプやファミコンなど、現代風の遊びは盛んだが、いわゆる遊びらしい遊びをしたことがないのが、現代の中学生なのであろう。

なお、**図4**によれば、そうした遊びの体験は、学年が上がってもそれほど増加していない。遊び体験が増えるのは、トランプやオセロなどに限られている。また、性別については**図5**のように、さすがに男子のほうが女子よりも遊び体験が多い。もともと遊びの中で興味をひくものは、男子中心であっただけに、こうした結果が生ずるのも当然のように思われる。

（表11）遊びの体験

└──→たこあげはせずにウノをする

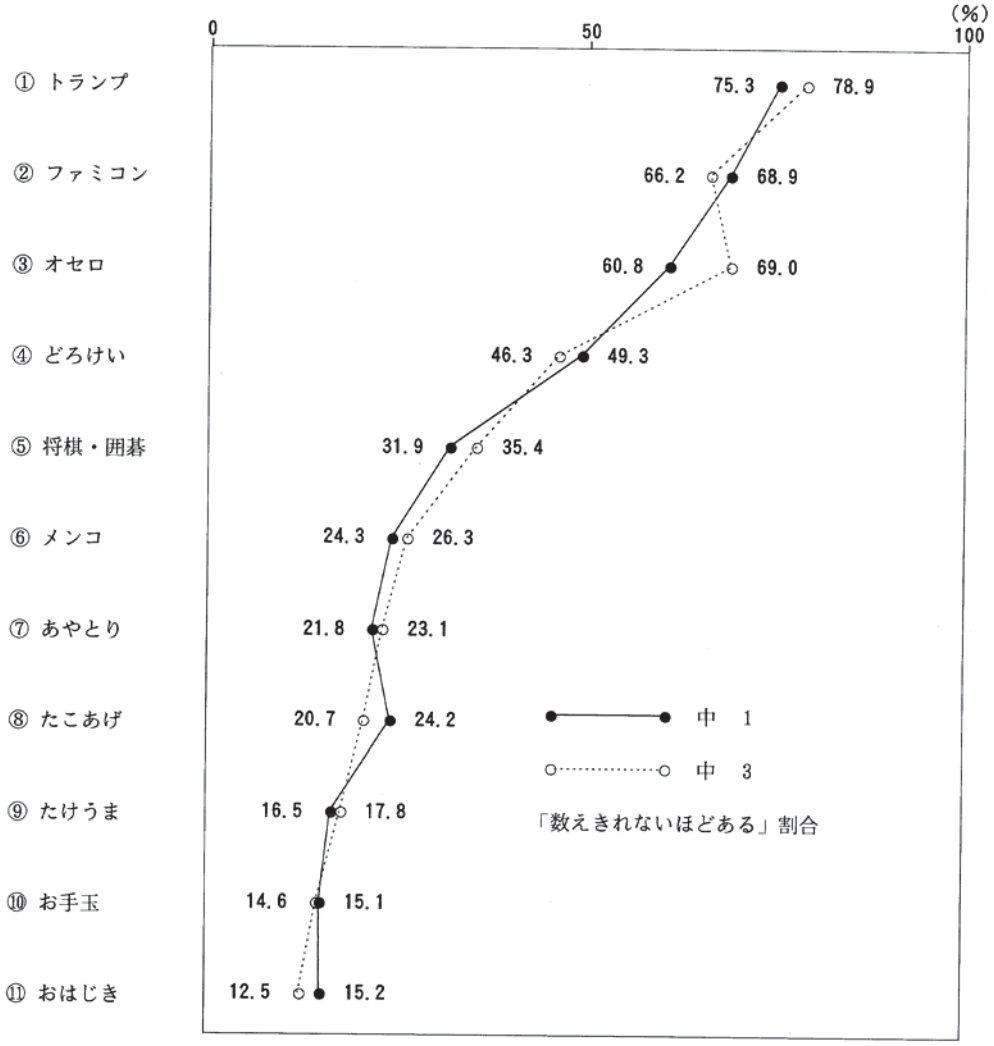
（%）

	1度もない	何回かある	数えきれないほどある	学年			性	
				中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
トランプ（ウノ）	1.5	22.2	76.3	75.3	75.0	78.9	76.7	76.0
ファミコン	1.2	29.9	68.9	68.9	71.8	66.2	85.8	50.6
オセロ	1.2	35.0	63.8	60.8	61.7	69.0	66.7	60.7
どろけい	12.3	40.3	47.4	49.3	46.4	46.3	54.2	40.0
将棋・囲碁	20.0	47.2	32.8	31.9	31.1	35.4	52.7	10.8
メンコ	11.6	63.5	24.9	24.3	24.3	26.3	39.1	9.4
あやとり	13.1	65.3	21.6	21.8	20.1	23.1	12.5	31.6
たこあげ	2.6	76.0	21.4	24.2	18.8	20.7	31.0	11.0
たけうま	7.6	76.3	16.1	16.5	14.0	17.8	19.8	12.1
お手玉	13.5	71.3	15.2	15.1	16.0	14.6	11.8	19.0
おはじき	19.4	66.4	14.2	15.2	14.7	12.5	11.0	17.6

学年・性別は「数えきれないほどある」割合

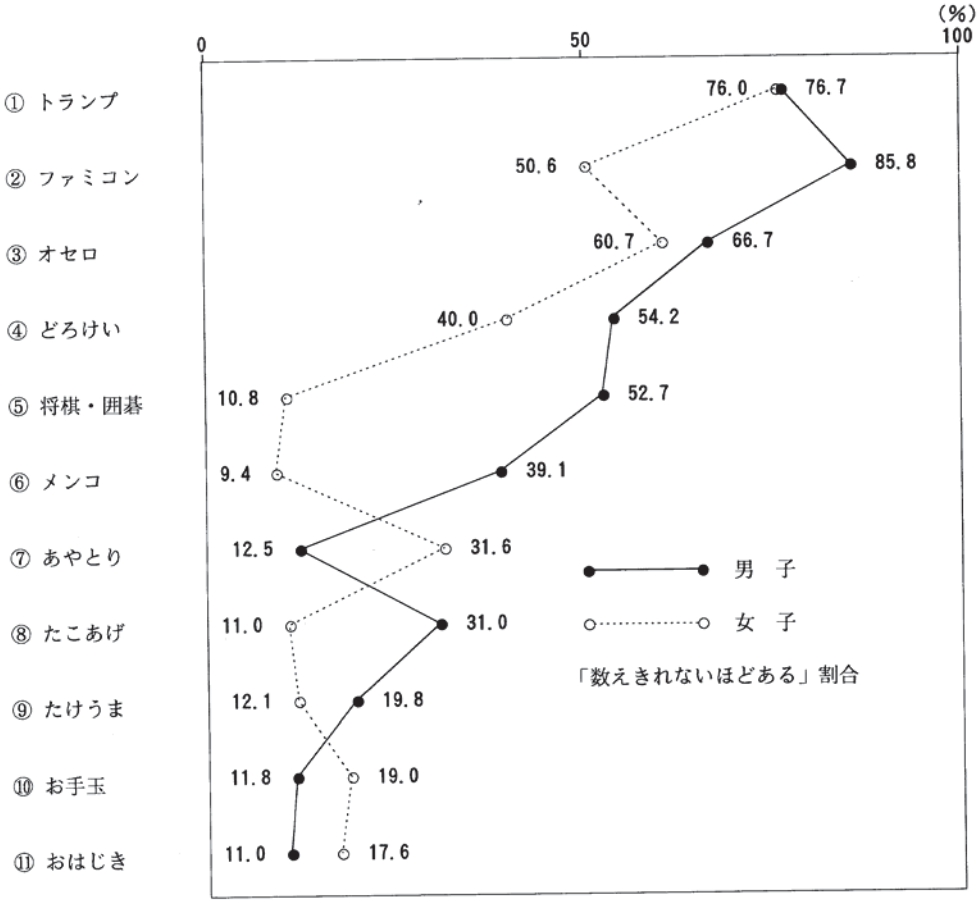
（　）は最大値

（図４）遊び × 学年


(%)
0
50
100
① トランプ
② ファミコン
③ オセロ
④ どろけい
⑤ 将棋・囲碁
⑥ メンコ
⑦ あやとり
⑧ たこあげ
⑨ たけうま
⑩ お手玉
⑪ おはじき
75.3
78.9
66.2
68.9
60.8
69.0
46.3
49.3
31.9
35.4
24.3
26.3
21.8
23.1
20.7
24.2
16.5
17.8
14.6
15.1
12.5
15.2
中 1
中 3
「数えきれないほどある」割合

（図５）遊び × 性

└──→男子はファミコンや将棋



2．手伝いの体験

生徒たちの体験の中で、生活体験をもっとも得やすいものは手伝いであろう。そこで、手伝いについての体験を尋ねると、**図6**のような結果となる。

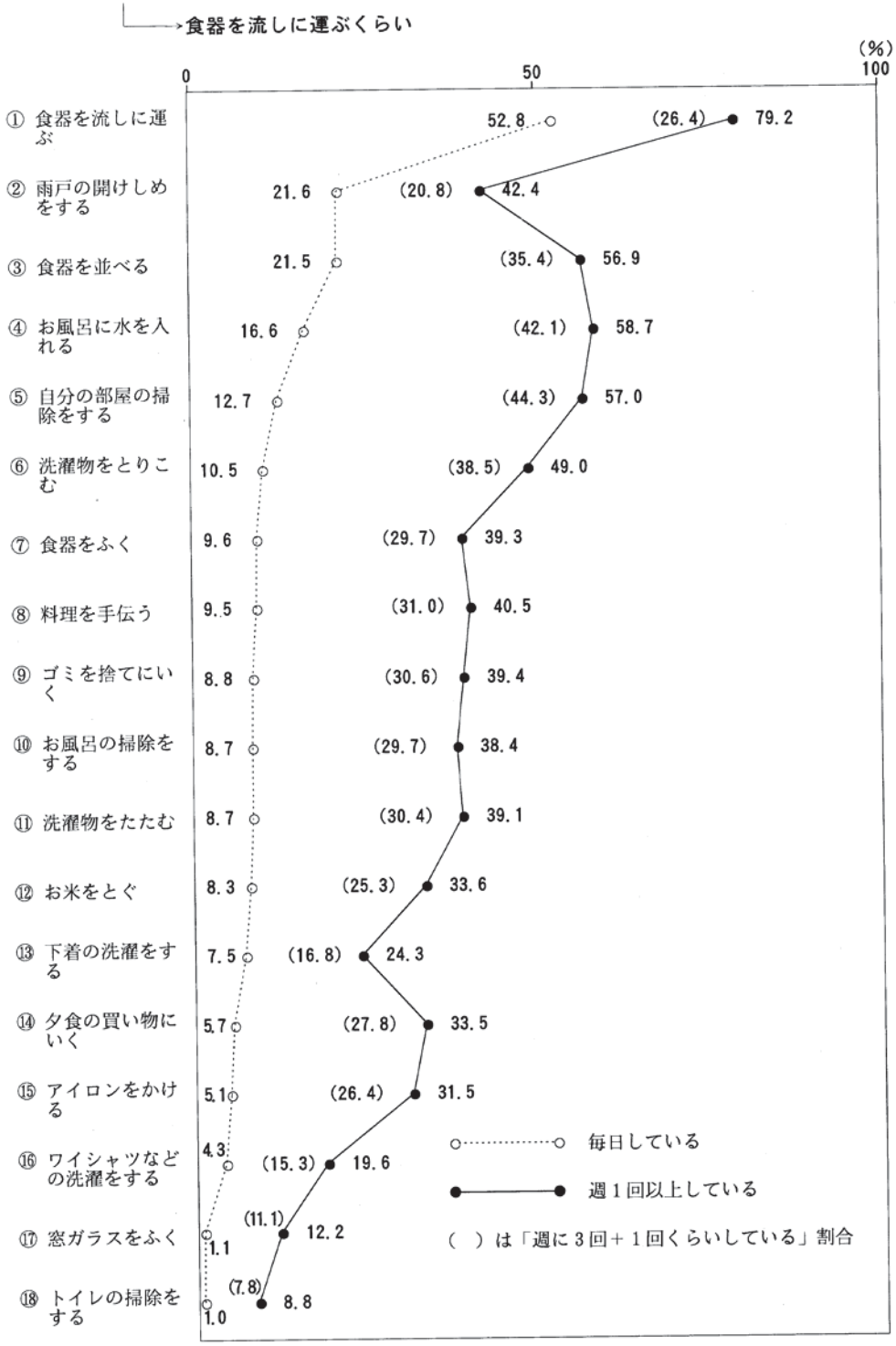
毎日のようにしているのが5割を超えるのは「食器を流しに運ぶ」くらいで、その他は「週に1回くらいする」を含めても、「食器を並べる」や「お風呂に水を入れる」「自分の部屋の掃除」くらいに限られている。そして、その他の家事をしている割合は、週1回でも3～4割にとどまっている。

また、**図7**に示したように、手伝いをする割合は、学年が上がっても高くなるどころか、むしろやや減少している。中3になるにつれて、高校受験の勉強に追われるからであろうか、手伝いの割合が減っているのが目をひく。

そして、手伝いと性別との関係をまとめたのが**図8**で、図のプロフィールが示すように、女子は男子よりも手伝う割合が高い。男子が手伝いをまったくといっていいほどしていないのも困ったものだが、女子にしたところで「食器を流しに運ぶ」(82%)か「食器を並べる」(58%)を除くと、している割合は3～4割にとどまっている。

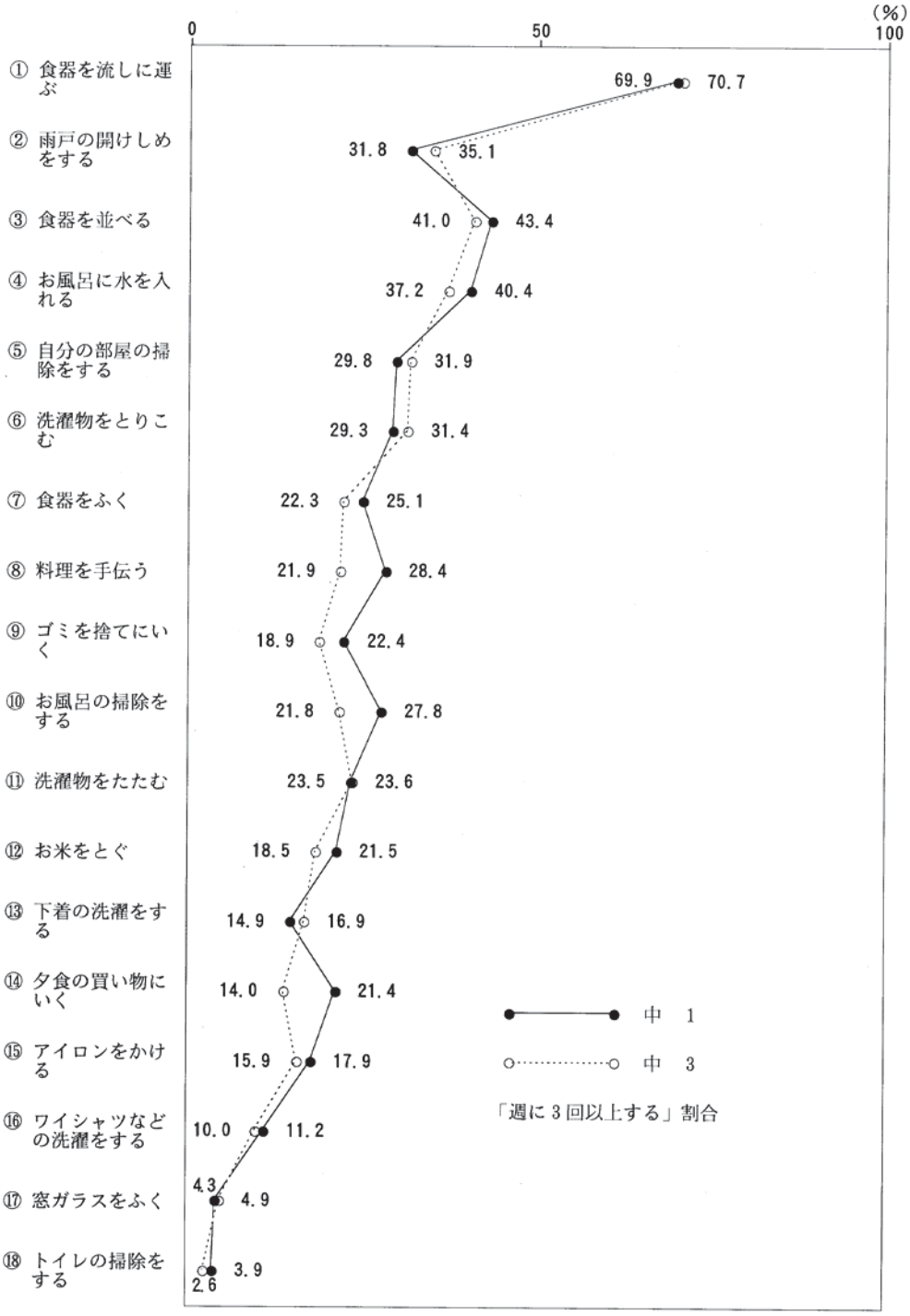
表12に「食器を並べる」についての属性別のクロス集計結果を示した。男子の場合「したことがまったくない」の12%に、「今までに何回か」の36%を含めて、48%の男子がほとんど食器を並べたことがないという。

（図６）手伝い


食器を流しに運ぶくらい
(%)
0
50
100
① 食器を流しに運ぶ
52.8
(26.4)
79.2
② 雨戸の開けしめをする
21.6
(20.8)
42.4
③ 食器を並べる
21.5
(35.4)
56.9
④ お風呂に水を入れる
16.6
(42.1)
58.7
⑤ 自分の部屋の掃除をする
12.7
(44.3)
57.0
⑥ 洗濯物をとりこむ
10.5
(38.5)
49.0
⑦ 食器をふく
9.6
(29.7)
39.3
⑧ 料理を手伝う
9.5
(31.0)
40.5
⑨ ゴミを捨てにいく
8.8
(30.6)
39.4
⑩ お風呂の掃除をする
8.7
(29.7)
38.4
⑪ 洗濯物をたたむ
8.7
(30.4)
39.1
⑫ お米をとぐ
8.3
(25.3)
33.6
⑬ 下着の洗濯をする
7.5
(16.8)
24.3
⑭ 夕食の買い物にいく
5.7
(27.8)
33.5
⑮ アイロンをかける
5.1
(26.4)
31.5
⑯ ワイシャツなどの洗濯をする
4.3
(15.3)
19.6
⑰ 窓ガラスをふく
1.1
(11.1)
12.2
⑱ トイレの掃除をする
1.0
(7.8)
8.8
毎日している
週１回以上している
（　）は「週に３回＋１回くらいしている」割合

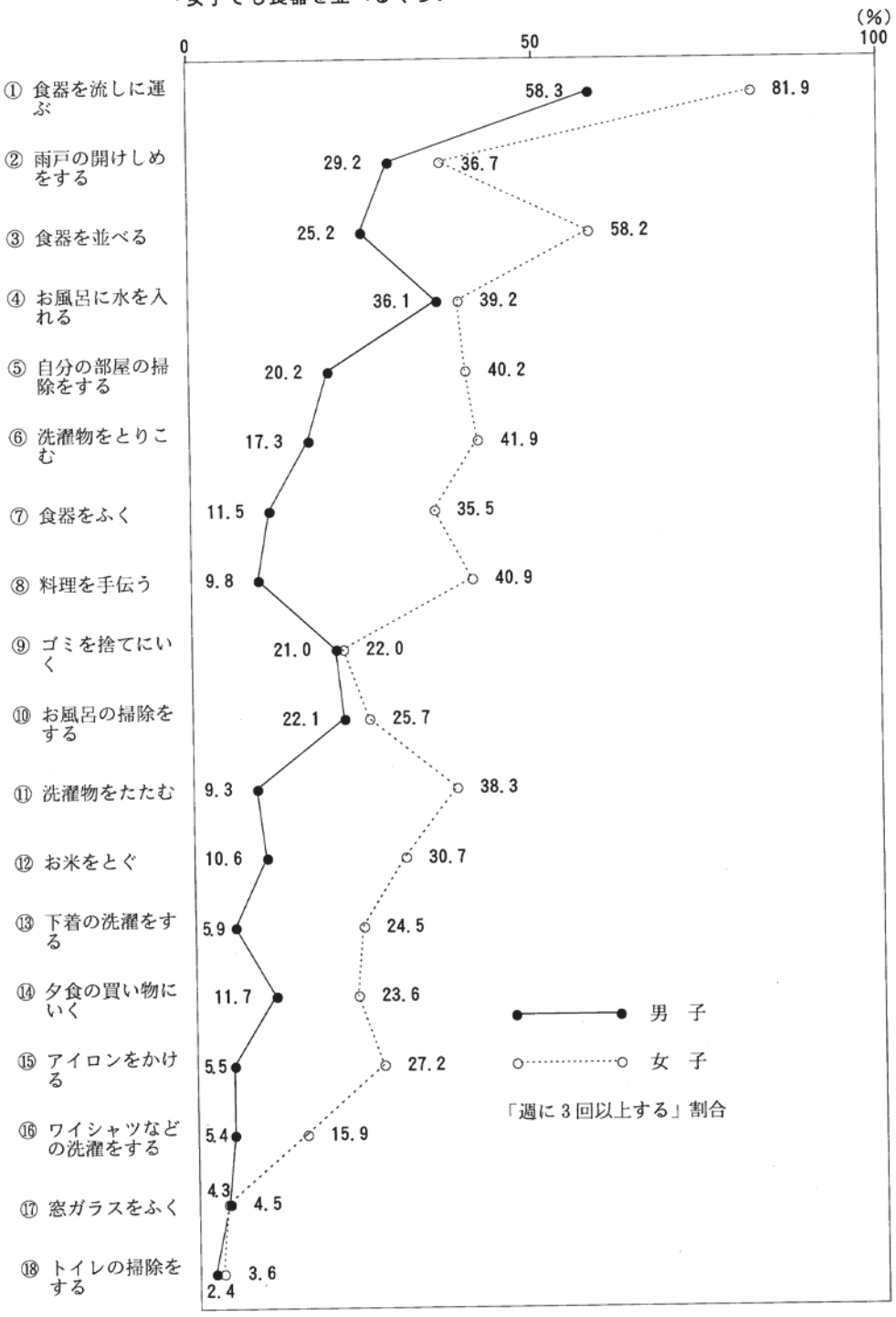
（図７）手伝い × 学年

→学年が上がっても変わらない



（図８）手伝い × 性

└──→女子でも食器を並べるくらい



(表12) 食器を並べる × 属性

└→男子は今までに何回か

(%)

		毎日	週に3回	週に1回	月に1回	今まで何回か	したことがない
全体		21.5	19.5	15.9	11.4	25.1	6.6
性	男子	11.9	13.3	14.2	13.3	35.6	11.7
	女子	32.1	26.1	17.8	9.3	13.7	1.0
成績	上	20.1	15.8	23.9	11.5	23.7	5.0
	中の上	17.9	18.2	18.8	13.4	25.4	6.3
	中	20.5	21.0	14.9	10.4	27.3	5.9
	中の下	25.3	17.8	10.0	9.3	27.9	9.7
やる気がある	とてもそう思う	19.9	23.9	14.8	14.1	22.5	4.8
	かなりそう思う	19.3	17.1	17.8	12.8	25.5	7.5
	ややそう思う	20.3	20.7	16.4	9.3	28.0	5.3
	あまり＋ぜんぜんそう思わない	25.9	16.3	11.4	9.6	26.6	10.2
人の役に立たない	とてもそう思う	24.3	13.0	14.1	10.2	28.2	10.2
	かなりそう思う	21.8	16.6	16.9	11.5	25.6	7.6
	ややそう思う	19.5	19.9	16.3	13.4	25.0	5.9
	あまり＋ぜんぜんそう思わない	23.3	23.1	14.9	9.7	24.0	5.0

3．自立の習慣

これまでふれてきたように、生徒たちの体験は乏しいし、中学生になってから増加もしていない。

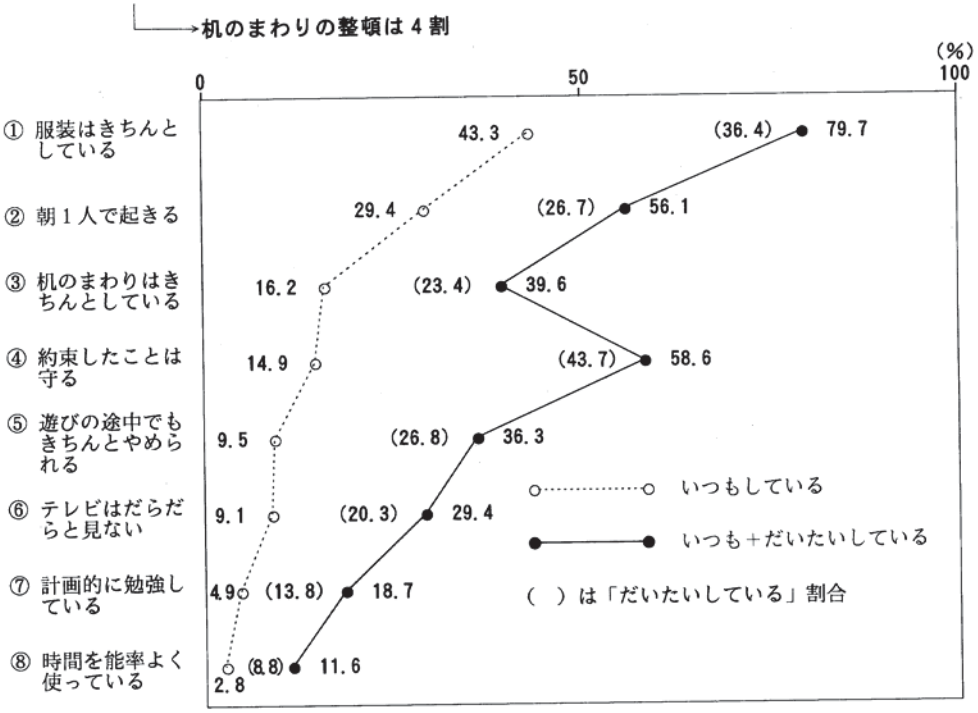
それでは、体験をしていない生徒は、どのような生活を送っているのか。体験をしていないにしても、自分のことは自分でしているのであろうか。

図9に示したように「服装はきちんとしている」生徒は8割に達する。しかし、「机のまわりはきちんとしている」のは「いつも」に「だいたい」を含めて40％にとどまっている。また「計画的に勉強している」生徒も19％である。

そして自立の習慣と性別との関係は、**図10**にくわしい。それほど顕著な差ではないが、男子より女子のほうが「机のまわりの整頓」や「約束したことは守る」などに自信を持っている傾向が得られている。

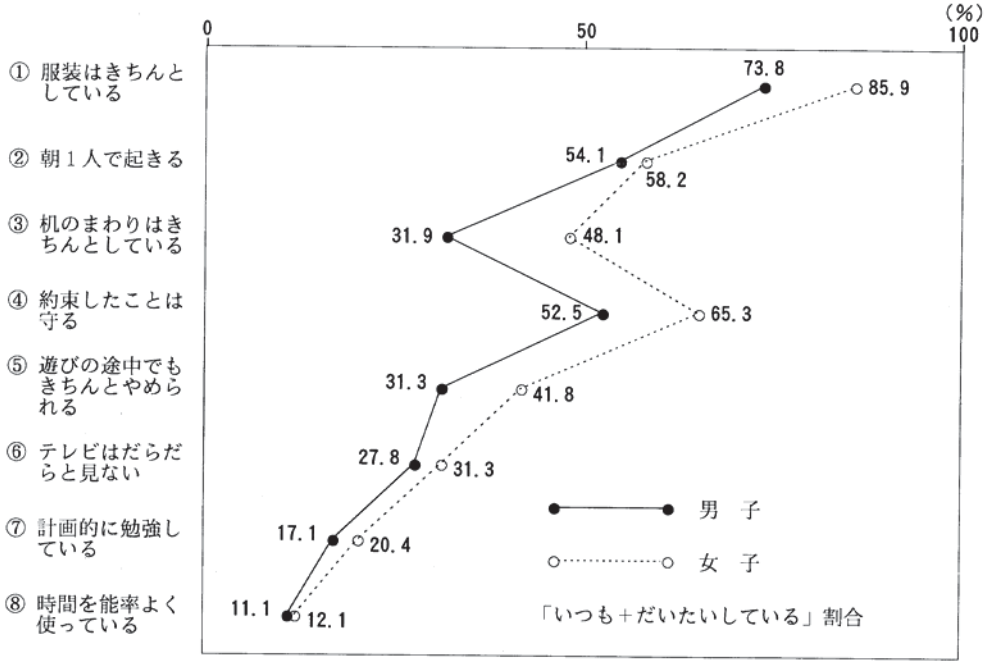
それでは、学年との関係はどうか。**図11**のように、中1と中3とを対比させてみると、どちらかというと、中1のほうが自立している割合が高い。3年生は高校受験を控えているので、どうしても生活がルーズになるのであろうか。

（図9）自立の習慣



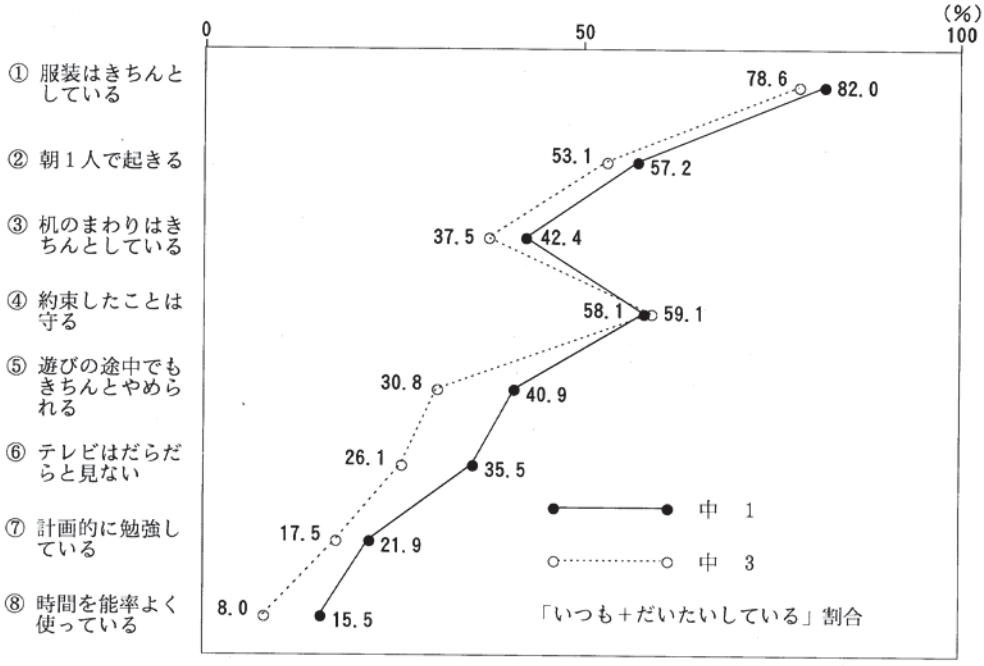
（図10）自立の習慣 × 性

└→女子のほうがきちんとしている

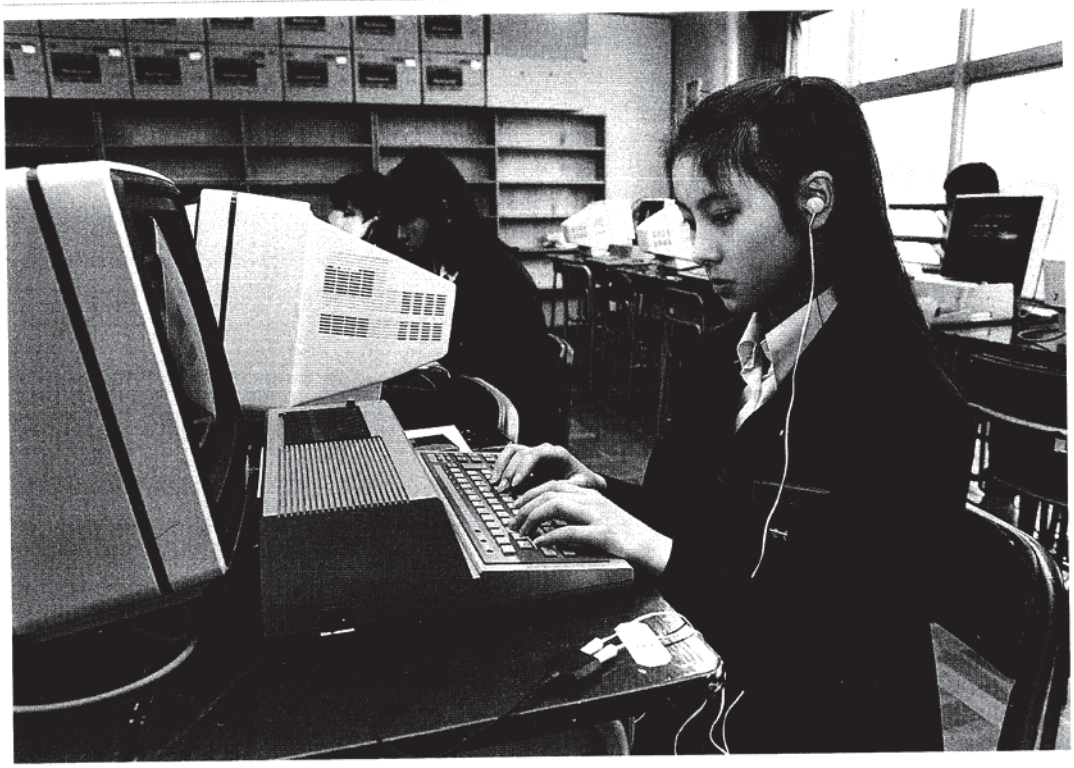


（図11）自立の習慣 × 学年

└→中１のほうがしっかりしている



第Ⅲ章　自己像に関連させて



1．将来の見通し

このように生徒たちの体験は、さまざまな角度から分析をしても豊富とはいいがたいが、生活体験をまとめるにあたって、そうした直接体験を欠く生徒たちの、これからの成長について、若干の見通しを述べておきたい。

表13は、生徒たちの持ち物のリストだが、「自分専用に持っているもの」の問いに、ラジカセ72％、CD70％、電卓61％などの数値が戻ってくる。専用のワープロを持っている者も18％を超える。

物に囲まれて生活している感じだが、それでは将来の見通しはどうか。**表14**に示したように、「有名な高校へ入れそうか」について、「とても入れない」の34％に、「たぶん」の45％を含めると、79％の生徒が入るのはむずかしいと考えている。しかも、入れそうもないと思う生徒は、中１の74％から、中２の78％、そして中３の84％と、学年が上がるにつれて増加していく。

さらに、東大や早慶などのビッグな大学への進学見通しについても、**表15**のように、78％と、４分の３を超える生徒は、そうした大学への進学はむずかしいと予想している。

たしかに大学入試のむずかしい状況のもとで、いわゆる有名高校や一流大学への進学はむずかしいと思うのはやむをえまい。もちろん進学がすべてではないし、そうした一流大学へ入学しなくても、いくらでも、それぞれ

に充実した人生を送りうるのはたしかであろう。

しかし中学生くらいなら、がんばればなんとかなると思っていいのに、残念ながら、ほとんどの中学生は、進学は見込み薄と思っているのは、これまでの図の示す通りである。

（表13）生徒の持ち物

→専用のラジカセが72%

（%）

	全体	学年			性	
		中1	中2	中3	男子	女子
ラジカセ	71.9	66.0	73.3	77.5	68.3	75.9
CD	69.6	56.6	76.0	78.8	67.2	72.3
電卓	60.5	55.7	60.4	66.3	62.2	58.6
ファミコン	58.5	56.4	61.5	58.3	75.3	40.2
ピアノ・ギター	40.6	39.0	43.2	39.8	27.6	54.8
カメラ	39.7	33.6	42.5	44.2	41.6	37.7
ヘッドホン・ステレオ	34.2	29.4	35.8	38.5	38.9	29.2
皮靴	32.4	29.0	33.7	34.9	28.3	36.8
ステレオ	27.9	21.9	30.1	32.7	32.5	22.7
ワープロ	18.3	16.6	18.6	20.2	19.4	17.1
パソコン	10.6	9.5	11.3	11.2	15.8	4.8

専用のものを「持っている」割合

(表14) 有名な高校へ入れそうか

└→たぶん入れない

(%)

		入れる		入れない	
		ぜったい	たぶん	たぶん	とても
全体		3.5	17.8	(45.2)	33.5
性	男子	5.6	20.8	44.3	29.3
	女子	1.2	14.6	46.2	38.0
学年	中1	4.6	21.3	49.1	25.0
	中2	2.6	19.1	47.4	30.9
	中3	3.1	12.5	38.5	45.9

(表15) 東大や早慶への入学

└→「無理だろう」が78%

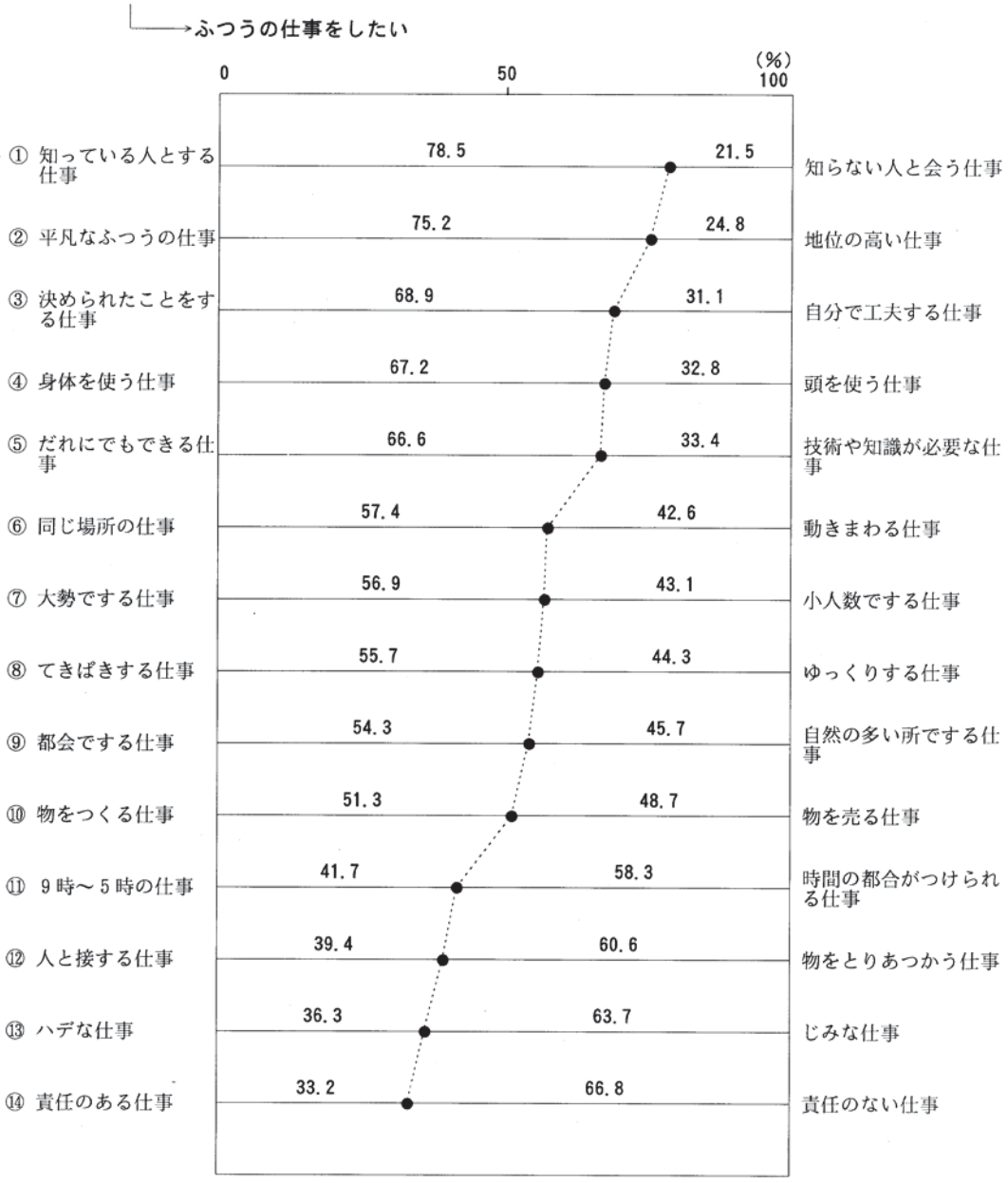
(%)

		入れる		入れない	
		ぜったい	たぶん	たぶん	とても
全体		5.8	16.3	32.9	45.0
性	男子	8.8	17.6	32.3	41.3
	女子	2.6	14.9	33.5	49.0
学年	中1	6.9	20.3	35.6	37.2
	中2	4.1	15.5	34.7	45.7
	中3	6.1	12.1	27.8	54.0

2．どんな仕事につきたいか

それでは進学はともあれ、生徒たちはどのような人生を送ろうとしているのか。将来つきたい仕事を「平凡なふつうの仕事」と「地位の高い仕事」、あるいは「身体を使う仕事」と「頭を使う仕事」のように、対の形で尋ねてみた。

（図12）仕事のタイプ



結果は**図12**の通りだが、３分の２以上の生徒たちが望んでいるのは、以下となる。

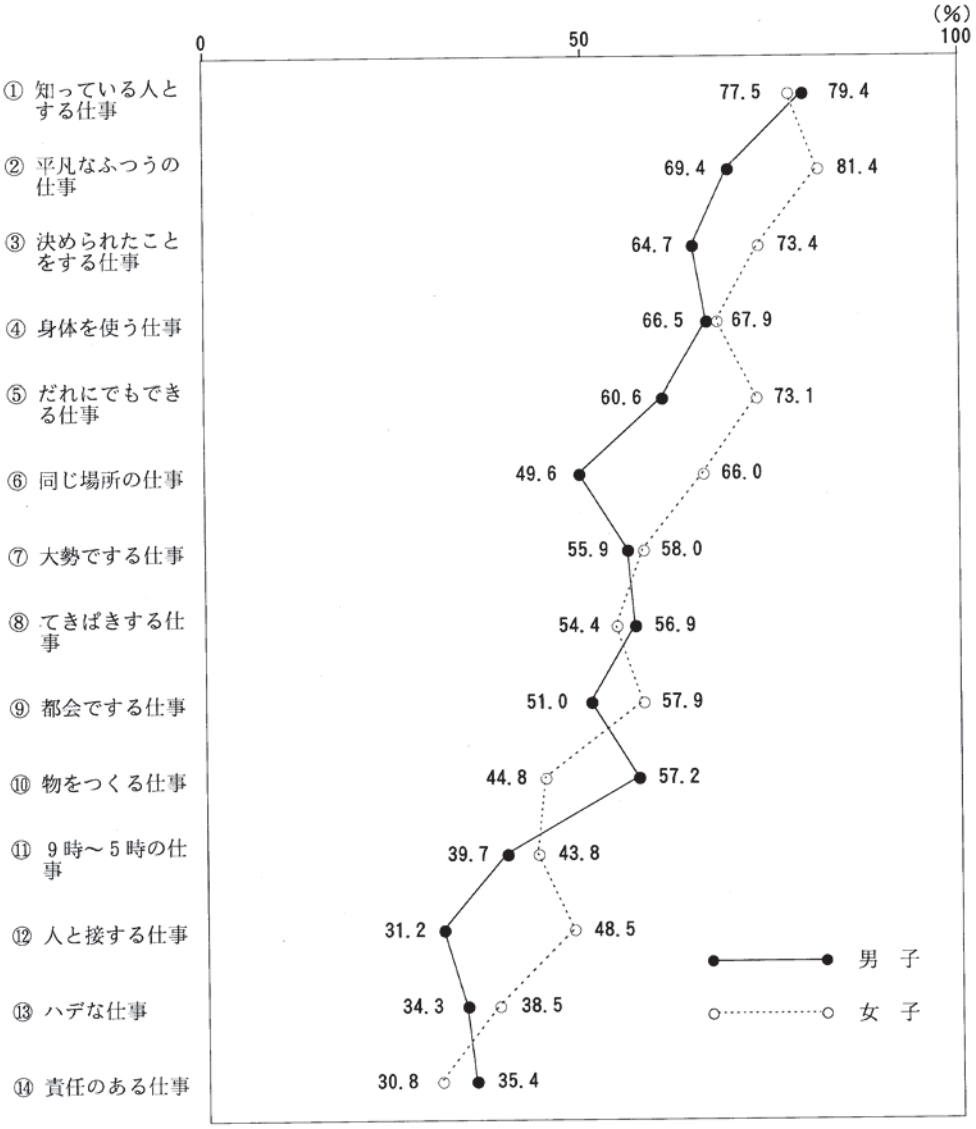
①知っている人とする仕事　78.5%
②平凡なふつうの仕事　75.2%
③決められたことをする仕事　68.9%
④身体を使う仕事　67.2%
⑤責任のない仕事　66.8%

つきつめていうと、顔見知りの人と、決められた平凡な仕事を、身体を使ってしたいという反応である。中学生としては、なんとなく覇気に欠ける感じがしてならない。

そして、性別についてのクロス集計結果を**図13**のように全体として見ると、ルーティン・ワーク（決まりきった仕事）を好むのは男子よりも女子のほうに強い。しかしその差は、下記のようにそれほど大きくない。

（図13）仕事のタイプ × 性

→女子のほうが決められた仕事を望む



	男子	女子
平凡なふつうの仕事	69.4%	81.4%
決められた仕事	64.7%	73.4%

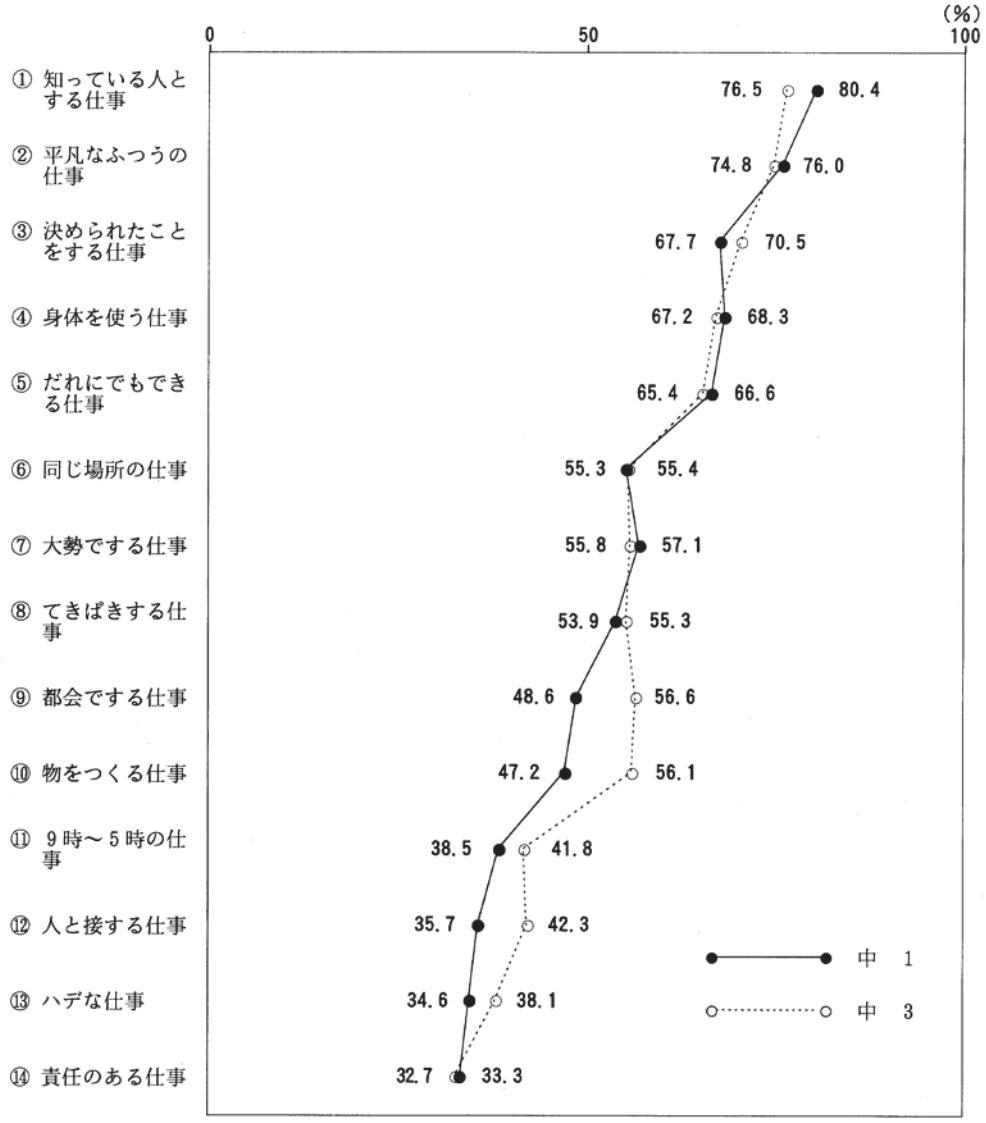
女子と同じように、男子もチャレンジするよりも、安定した仕事を望むようになったのであろうか。

さらに、**図14**から明らかなように、安定した仕事を望む態度は、学年が上がってもほとんど変わっていない。だが一方で、中３になると、「都会でする仕事」（中１の49%から中３の57%へ）や、「物をつくる仕事」（47%から56%へ）を希望する生徒が増加している。

いずれにせよ、中学生にしては、その反応が将来に意欲を見せていないのが気がかりである。

（図14）仕事のタイプ × 学年

→学年による差は少ない



3．自分への自信

将来に対する見通しは暗かったが、生徒たちは自分に自信を持っているのだろうか。

自分に対する自信については、**図15**にくわしい。「たぶん」も含めて「できるだろう」の回答が過半数を超えたのは、「ビルの5階までかけ上る」(71%）と、「ホテルの火事でも逃げ出せる」(52%）くらいで、「夏の暑い日に2時間立っていられる」(28%)、「1日くらい絶食しても勉強ができる」(27%）などは、3割以下にとどまっている。

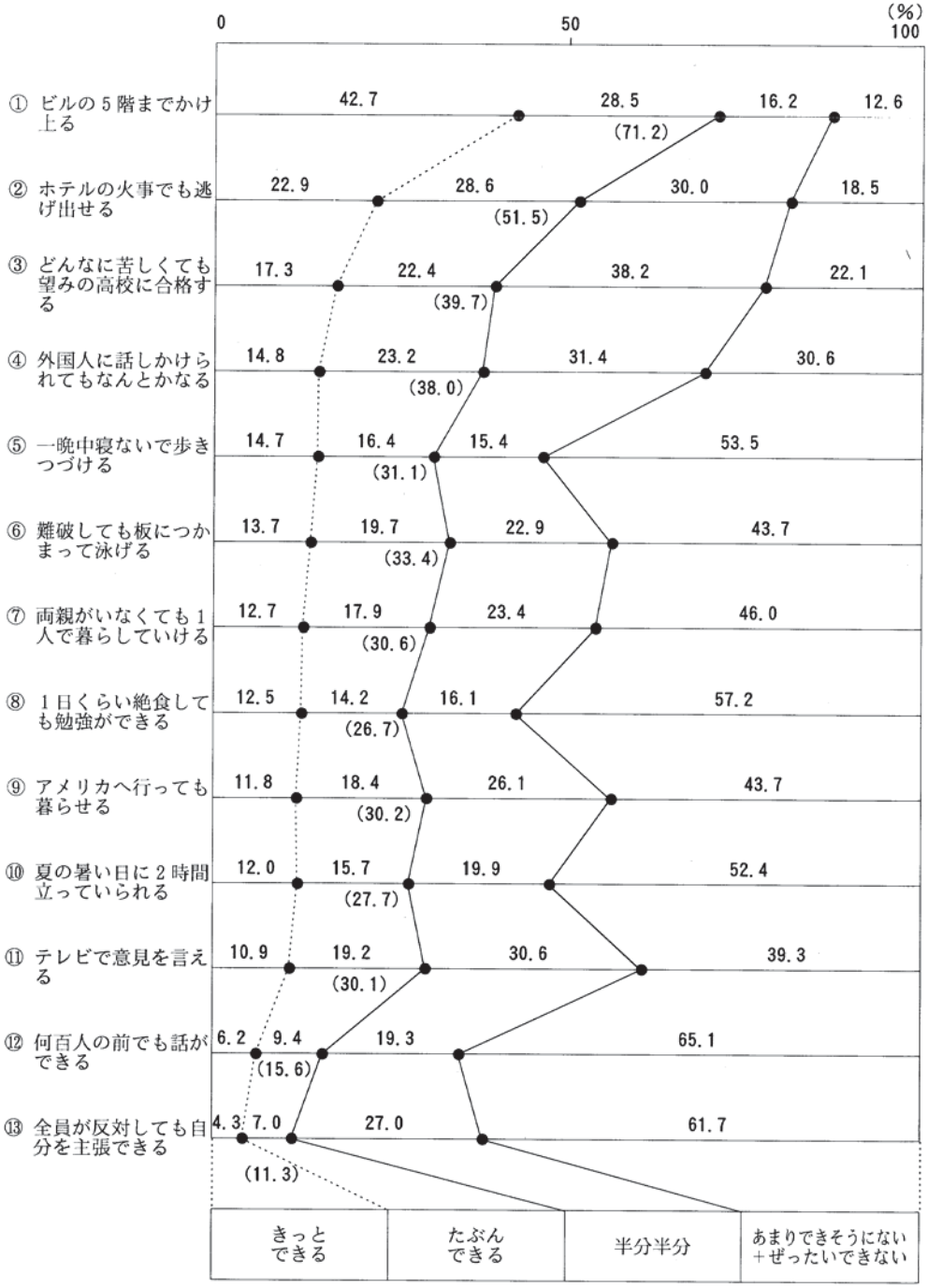
なお性別については、**図16**のように、さすがに体力面での自信は、女子より男子のほうに目につく。

また、学年別のデータでは、**図17**のプロフィールから明らかなように、学年による変化はそれほどシャープではない。「ホテルの火事でも逃げ出せる」と思う。しかし「望みの高校に合格するのはむずかしい」かもしれないが、学年による変化となる。

こう見てくると、中学生は全体として、自分に自信を持っていないように見える。なお、中学生たちの自分についての自己評価は、**図18**のように、健康については自信があるが、その他はあまり自信はないにとどまっている。

（図15）自分への自信

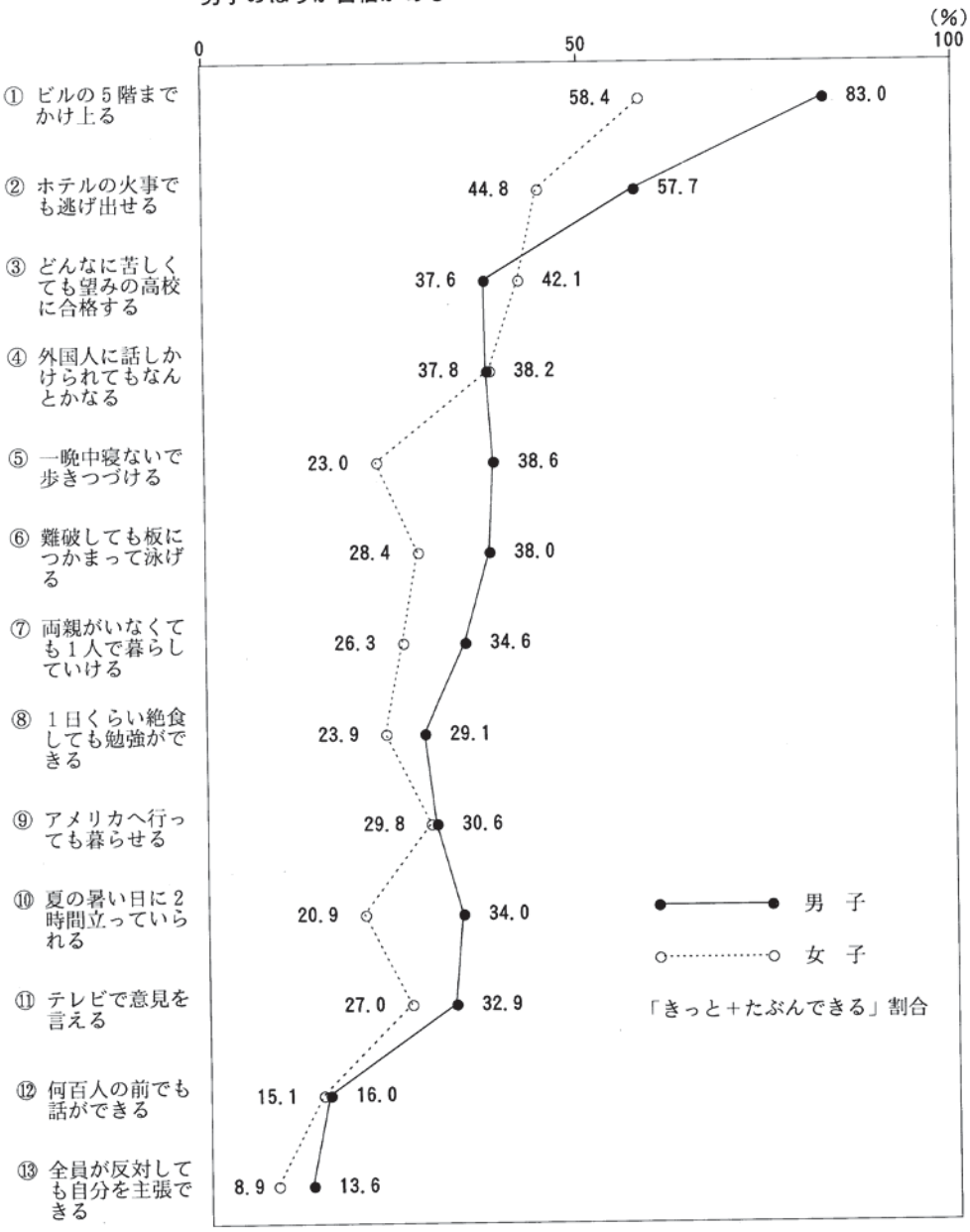
→絶食すると勉強ができない



（　）は「きっと＋たぶんできる」割合

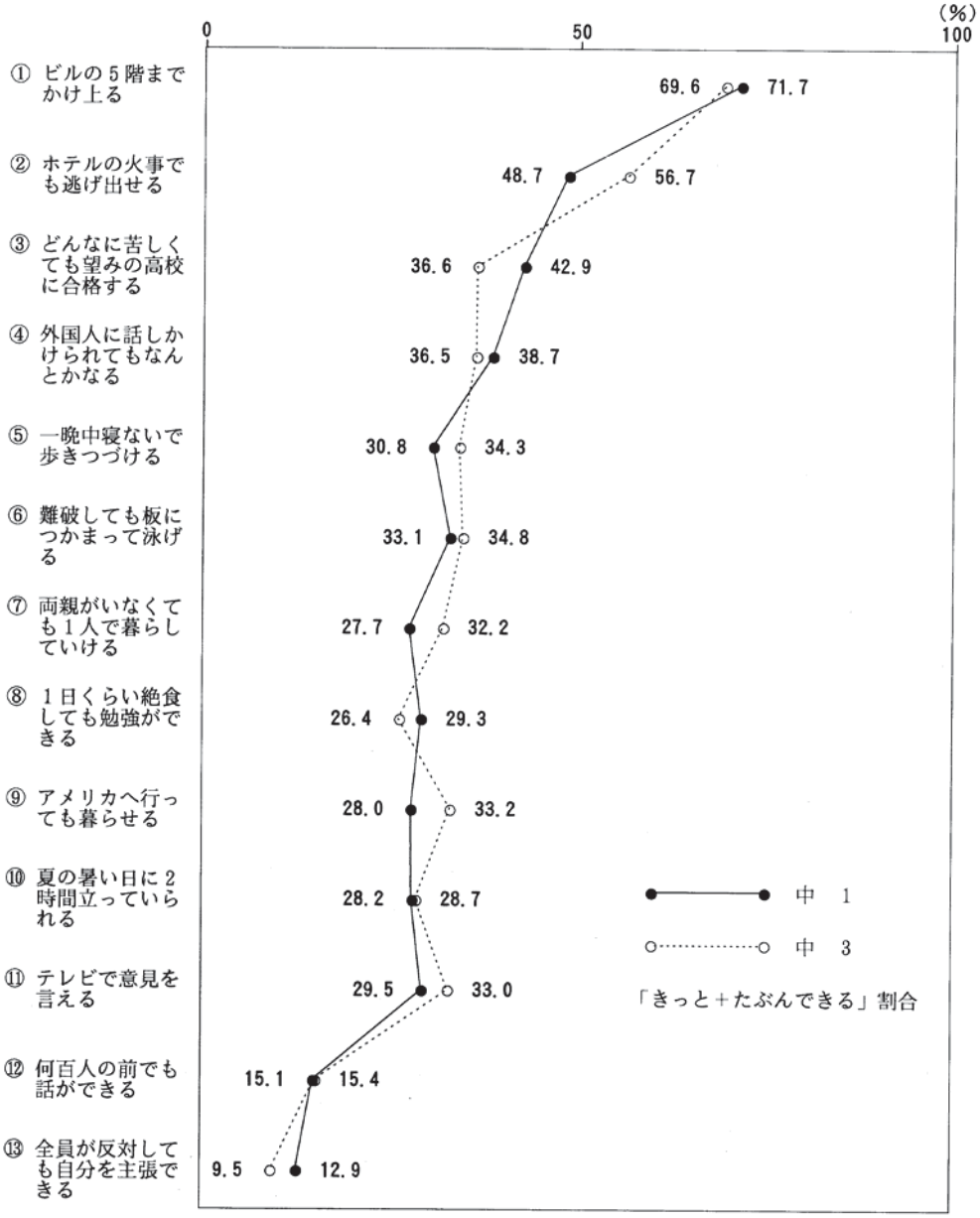
(図16) 自分への自信 × 性

→男子のほうが自信がある

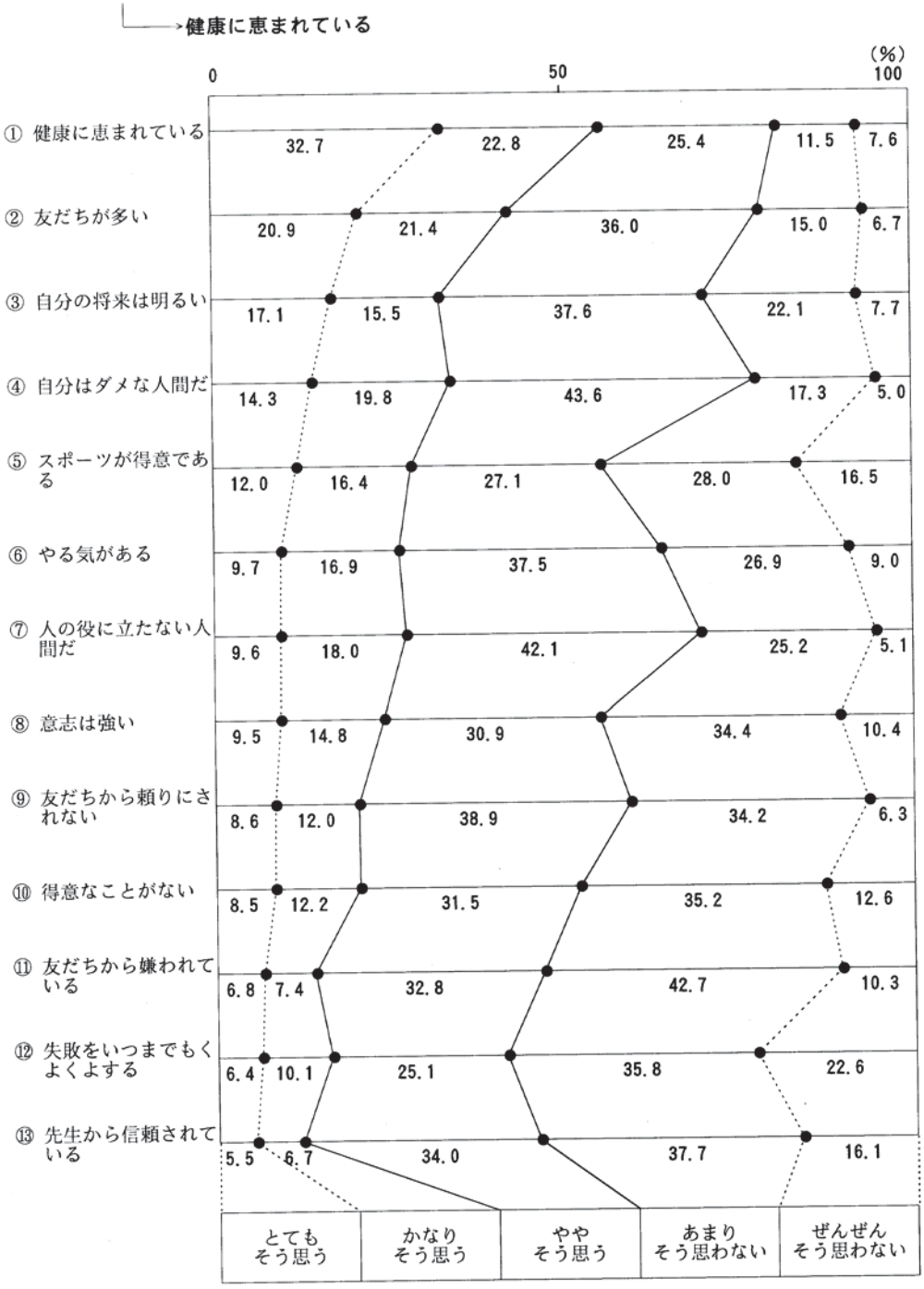


（図17）自分への自信 × 学年

→あまり差はない



(図18) 自分のタイプ


健康に恵まれている
(%)
0
50
100
① 健康に恵まれている
32.7
22.8
25.4
11.5
7.6
② 友だちが多い
20.9
21.4
36.0
15.0
6.7
③ 自分の将来は明るい
17.1
15.5
37.6
22.1
7.7
④ 自分はダメな人間だ
14.3
19.8
43.6
17.3
5.0
⑤ スポーツが得意である
12.0
16.4
27.1
28.0
16.5
⑥ やる気がある
9.7
16.9
37.5
26.9
9.0
⑦ 人の役に立たない人間だ
9.6
18.0
42.1
25.2
5.1
⑧ 意志は強い
9.5
14.8
30.9
34.4
10.4
⑨ 友だちから頼りにされない
8.6
12.0
38.9
34.2
6.3
⑩ 得意なことがない
8.5
12.2
31.5
35.2
12.6
⑪ 友だちから嫌われている
6.8
7.4
32.8
42.7
10.3
⑫ 失敗をいつまでもくよくよする
6.4
10.1
25.1
35.8
22.6
⑬ 先生から信頼されている
5.5
6.7
34.0
37.7
16.1
とても そう思う
かなり そう思う
やや そう思う
あまり そう思わない
ぜんぜん そう思わない

＊まとめに代えて＊

中学生たちの体験は予想された以上に狭く、限られていた。生活体験や自然体験が少ない上に、遊び体験や手伝い体験も少ない。しかも学年が上がっても、体験量は増加していない。

情報化社会の状況を考えると、間接体験が肥大しても仕方がないようにも思う。しかし、中学生たちは、将来についても閉ざされたイメージを抱き、自分に自信を持てないでいた。

体験のなさに自信のなさが加わるので、生徒たちのこれからの成長が気がかりである。